桜舞う日

さつきひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜舞う日

【Ｎコード】
Ｎ６９３９Ｗ

【作者名】
さつきひろ

【あらすじ】
ごくありふれた女子高生、桜。
ある日、緋月と名乗る少女が目の前に現れたことから、平凡から遠ざかっていく。
繰り返し見る夢の記憶と、脳裏にちらつく青年の面影。
それは、かつて、桜の魂であったものが経験した、もうひとつの人生だった。

1

梅雨時だというのに、珍しく快晴だった。
そろそろ本格的な暑さが始まろうかという気配を含み、空気はこの時期特有の湿った重さを持って身体に纏わりつく。一日やそこら晴れた程度では、この鬱陶しい湿気を解消することはできないらしい。
そもそも、日本の夏は湿気が多いのだ。
それでも、降り続ける雨に室内に閉じ込められる日々が続いて悩まされることに比べれば、過ごしやすい日だ。雨につられてじめっとしていた気分も、多少なりとも爽やかなものに変わることに間違いはなかった。
そんなありふれた日の、昼下がりである。
新学期が始まってから、既に二ヵ月ほど。入学した当初のぎくしゃくとした様子はだいぶ薄れ、それぞれにグループなども出来上がっているような頃合いだ。
そんなグループ分けも何も関係なく、このクラスは変なことに熱中していた。それも、何故か、昼休みを利用しての恒例行事である。飽きもせず、毎日のように続けられているクラス内対抗ドッジボール大会と名付けられたそれが、今、佳境を迎えようとしていた。
さして広くもない中庭には、教室から持ち出して来たチョークで歪なコートが書いてある。クラスを紅白の二チームに分け、それぞれがその日の放課後の掃除当番を賭けての大熱戦が、連日飽きもせずに繰り広げられているのである。
ここ数日は雨続きで外に出られず、この大会も微妙に停滞していた。もはや日課になっているそれが行われなかったその反動なのか何なのか、いつもよりも騒ぎが大きくなっているように思える。
何しろ、久しぶりの太陽に忙しくするのは、一部の人間に限ったことではないのだ。長雨におとなしくしていることを強いられたフラ

ストレーションは、相当に大きい。
とは言え、こんなことに、貴重な昼休みをつぶしている理由がどこにあるのか、わからない。暑い日にわざわざ更に汗をかくような遊びに興じているなんて、理解の範疇外だ。
かと言って、既にクラスの恒例行事になっているものを、無視しているのもどうかと思う。バカの一つ覚えのように毎日同じことで大騒ぎをしているクラスメイト男子を見やり、小柄な少女は窓際で溜め息をついた。
久々に晴れて気温は上がったものの、今朝方まで降っていた雨のせいで湿気は高い。天然パーマ気味の髪がもっさりと広がるのが、腹立たしくて仕方がない。片手で髪を押さえながらも、一応は応援のふりをして窓から外を眺めるしかなかった。
「桜！　ほら、応援したらいいよ！」
わずかに上ずった声を張り上げて、脇からもう一人の女子生徒が腕を掴む。
桜、と呼ばれた少女はほんの少し小首を傾げ、促されるようにしてもう一度視線を戻した。
コートの向こう側から、一人の男子生徒が手を振っている。同じクラスの佐山武だ。無駄に張り切り、どうでもいいことにこれほど熱くなっている辺りは、理解できない。始まる前はだるいだの何だのと文句を言っていたくせに、始まったら始まったで大騒ぎだ。このテンションで午後の授業が受けられるかと言えば、そんなはずもなく、八割の確率で沈没しているのが常だ。
「佐山くん、桜のこと気にしているみたいだし、応援してあげたら張り切るんじゃない？」
正直、どうでもいい話だ。
誰それが付き合っているだの、誰が誰を好きだの、周りの少女たちはそんな話が大好きらしい。桜は全くその手のことに興味も持てず、周囲からは変人扱いされている始末だ。
「そういうの、よく、わからないし……」

「また、桜はそんなこと言って」
ダメだよ、そんなんじゃ。と、腕を掴んだ少女が溜め息混じりに言う。
「でも、本当にわからないし、そんなことより図書館の方が」
「恋愛をそんなこと呼ばわり！　それじゃダメよ、桜！」
やたら大仰に嘆かれ、桜は困ったように笑った。
本当に、わからないから困る。だけど、そう言うとダメだと言われてしまうのだ。
男子のやっていることも理解できないけれど、友だちの言う恋愛モードも、それはそれでよくわからなかった。
そんな桜の疑問を他所に、熱戦は相変わらず続いている。
この勝負で負けた方が、本日の掃除当番になるのである。元気のあり余っている高校生男子のやることとしては妥当なことかもしれないが、怠惰な昼休みを過ごしたい者にとっては迷惑な話だ。
かと言って、クラスの和とやらを、蔑ろにしたいわけではない。
勝負の景品と言っても、たかが放課後の掃除当番から解放されるだけのことである。割り当てられたのなら、それに従っておとなしく掃除をすればいい。
だというのに、何をそこまで熱くなるのか、と疑問に思わなくもない。だが、おそらく、問題は掃除当番ではないのだろう。雨が続いていたせいでたまった苛々が、そこにぶつけられているに違いない。
ぼんやりと見ているうちに、どうやら勝負の行方は決まりかけているらしい。
先ほどの佐山がいるチームが劣勢らしく、頑張れと喚いている。これ以上何を頑張れと言うのか、と、周囲がくすくす笑い始めた。何しろ、コートの中に残っているのはたった一人なのだ。
残りは一人だ、やっちまえ。とでも言いたげな集中攻撃を必死に避けながら、たった一人残った人影は、コートの向こう側の相手に何事かを怒鳴り返す。こうなってしまったからには防御に徹するし

かないのだろうが、多勢に無勢はさすがにきついのだろう。顔つきはいやに真剣だ。
見ているだけの女子生徒もさすがに気の毒になってきたのか、きゃーきゃー言う声も静かになったようだ。
勝負は決まっているというのに頑張っているその男子生徒は、クラスでも一番小柄だ。その小柄な身体を活かした敏捷さでもってこの状況を作り出したわけなのだが、本人としてもあまり楽しくない時間なのかもしれない。
件の男子生徒――西野拓弥≪にしのたくや≫は、誰もが振り返るような目を引く美形、というのとは違う。運動神経にしても、すばしっこい以外には運動神経に秀でた様子を見せるわけでもない。それでも、人懐っこい笑みを浮かべてにこにこと寄って来られたら、十中八九「可愛い」と言われるようなタイプだ。女生徒からは一定数の人気がある、得な性分である。
「……ちょ、ちょっと待てっ！　何で、ここで集中攻撃が始まるんだ！？」
集中攻撃の的になりながらも、狭いコートの中を所狭しと逃げ回っている。その上で一人で騒いでいるのだから、元気があり余っている筆頭なのかもしれない。とうに諦めたのか、既に誰も相手にしていない。
何しろ、彼のいるチームは、既に全員が外野に出されていて、コートに残っているのは、彼ただ一人なのだ。その時点で、もはやこちらのチームの負けは決定しているはずなのだが、なかなか試合は終わる様子がない。最後の一人を討ち取るまでは、と、妙な方向に燃えているらしく、終わらないようである。
「昼休みが終了するまで、あいつが逃げきる方に学食のランチ一回分」
「じゃ、逃げきれずに終わる方に二回分」
必死になっている本人を完璧に無視して、違う話題に話を咲かせる薄情なチーム・メイトたちである。しかも、勝敗とは関係のない

部分が賭けのネタにまでなっている。
「頑張れよ、西野。負けたら殴るぞ」
「何だそれは！」
いつもと変わらない、クラスメイトたちの呑気な会話。それは、桜にとっての日常の風景だった。

結局のところ、最終的な結論からすれば、勇者・西野は昼休み終了まで無事に逃げきった。
しかし、逃げきれない方に賭けていた者が多かったらしく、理不尽なことに盛大に文句を言われた。ついでに言えば、やたらと小突き回されてもいた。
とは言え、その賭けとは別に彼のチームが負けたことに変わりはない。たとえどんなにアホくさくても、毎日の決めごとは決めごとだ。現在は、負けたチーム全員で、放課後の掃除に真面目に勤しんでいる。女子はその賭けには全く関係ないから、いつもの当番通りなのは当然のことだった。
「大体さぁ、西野が妙に逃げ回るのがどうかと思うんだ。普通はあそこまでやられたら、アウトだろ」
いつまでも負けたことをぐちぐちと言い募る佐山に、桜は思わず笑いそうになった。それを聞いた西野が、ムッとして薄情な友人を睨む。会話を聞く限り、佐山は西野が逃げきれない方に賭けていたらしい。
仮にも友人なら、逃げきる方に賭けるべきじゃないのかと言いたくなる。それは、いわれた西野も同じだったらしい。
「人のせいにするな」
じろりと睨まれても、佐山にはまるで堪えた様子がない。おそらく、聞いてはいないし、そう言っている西野にまるで迫力がないせ

いかもしれない。
大体、明日になったらまた同じことで騒ぎを繰り返すに決まっている。だったら、今日は今日で諦めればいいものを、何だって蒸し返すのかその気が知れない。
とりあえず、余計なお喋りを先生方に怒られる前に掃除だけは済ませてしまうのがいい。気を取り直して箒を持ち替えた桜は、ふと背後からの視線を感じて顔を上げた。
誰かが、自分を見ている。
それは、直感だった。
何かに教えられたとか、そういうことではない。はっきりと、誰かが自分を見ていることを感じてしまったのだ。
周囲には、自分たち以外に人影はなかった。校舎の中から、部活動らしい喚声とざわめきが聞こえるだけだ。
けれど。
確実に、何かの瞳が桜を捕らえていた。何を根拠にそう思うのかを考えるよりも先に、視線を感じた方向を振り向いた。
……誰も、いない。
通りがかる生徒の姿すら、そこにはない。
だが、確かに誰かがそこにいた。そのことを、何故か理解している気がした。気配だけが漂うその重苦しい空気に、ぞくりとしたのだ。それは、肌を冷気が撫で上げる、その感覚に似ていた。動けば汗ばむほどの陽気だというのに、寒気がするほどのものを感じたのだ。
気がつくと、全身から汗が噴き出していた。暑さや運動で流すものとは意味を異にする、後味の悪い汗だった。
（何、今の……？）
らず速度を速めていた心臓の鼓動が、そこら中に聞こえているような錯覚に陥る。
何が起きているのか、まるでわからなかった。それでも、何もないはずだと自分に言い聞かせる。

たいしたことではないはずだった。今までだって、何事もなく生活して来たのだから、気にするようなことではない、と。

しかし、桜の中にある何かの感覚が、それが決して単純なものではないことを教える。その瞬間の空気はおかしいのだと、何かが気づかせる。

そして、それは全ての前兆だった。

2

その日の学校からの帰り、桜はいつものように学校を出て、いつもの道を辿っていた。そこまでは何も変わらない、日常だった。途中で足を止めたのは、誰かが後ろからついて来ていることに気づいたからだ。

それは、学校で感じたものとは違う。言うなれば、どこか懐かしいような気もする気配だった。

やはり、それも直感でしかなかった。誰かが教えてくれたわけでもない。自分の中にある何かが、それを教えた。そんな感覚だった。

「……誰？」

桜は振り返ったが、誰もいない。だが、すぐ近くに誰かがいるのはわかる。その直感に従って、姿を見せない相手に向かって問いかけた。

「そこにいるんでしょ。出て来なさいよ」

「あら、私のこと、わかるの」

向けた、視線の先。

ちょうど、桜からは死角になる建物の影から出て来たのは、同じ高校の制服を着た少女だった。

しかも、場違いなくらいの美少女だ。背の中ほどまである黒髪は、さらりと流れるストレート。勝気そうな瞳はやたらと大きくきらめいて、桜のことを迷いもなくまっすぐに見据えている。

「どうして、私の後をついて来るの？」

一瞬、その眼差しに吸い込まれそうな錯覚を覚えて、桜は眩暈がしそうになる。それを振り払うように頭を振ってから、信じられないものを見て愕然とした。

目の前の少女は、宙に浮いていたからだ。

浮いている、と言っても、常識外れに高い場所から見下ろされているのとは違う。少女は、地面すれすれの所にふわりと立つように

浮いていたのだ。おまけに、彼女には地面に落ちているべき影がなかった。
今日は、快晴だ。天高く、なんて言いたくなるほどのいい天気なのだ。こんな日に、影ができないなんてありえない。もし、ありえるのだとしたら、そんな存在は、おそらく、人ではない。
（……嘘、でしょう？）
背中を冷たいものが滑り落ちて行くような、そんな気がした。桜は唾を飲み込もうとして、口の中がからからに乾いていることに、その時初めて気づいた。
吸い込まれてしまいそうなほどの、少女の視線が桜へと注がれる。相手の姿形だけ見れば、場違いに綺麗なだけのただの女子高生に見える。なのに、そうではないことを彼女自身の存在感が教えているような気がした。
「あなたが、桜？」
形のいい唇が、楽しそうに言葉を紡ぐ。その内容に、桜は驚いてその少女を見返した。
見も知らぬその少女から、いきなり呼び捨てにされるとは思わなかった。初めて会った見も知らぬ少女に呼び捨てにされるような覚えはない。
桜はどうしようもなくムッとして、思わず言い返す。
「人に名前を聞くんだったら、そっちから名乗るのが礼儀じゃないの」
その切り返しに、少女は一瞬びっくりしたように目を瞬かせる。それから、にやりと笑った。
「ああ、そうね。あなた、それでも、あの人の色を受け継ぐのよね。敬意を示さなきゃ駄目かしら」
くすくすと笑って、その少女は桜を見た。
「私は緋月よ。今日はあなたの顔を見に来ただけだから、これで帰るわ。また、すぐに会う機会もあるから、その時に会いましょう？」
一方的にそう告げて、緋月と名乗った女は桜の前から消えた。文

字通り、消えたのだ。
そして、それは、桜が巻き込まれる諸々のできごとの、前哨戦にしか過ぎなかったのだ。

「……今のがそうですか？」
桜の姿が遠くなって見えなくなると、再び少女はそこに降り立った。音も無く降り立つ彼女の後ろに、ひっそりと立つ影がある。住宅の立ち並ぶその場にはまるでそぐわない、神職にある者を彷彿とさせる衣装は、少女の纏うありふれた高校の制服とは全く相容れない。けれど、付き従うように立つ姿は、どこか優美に彼女の雰囲気に寄り添っている。それは、まるで絵画に描かれた一対のようで、それでいてどこか相容れなさを含ませる不思議な感覚だった。
穏やかな声を発したその影は、ひどく秀麗な容貌を持った少年だった。青年と呼ぶにはまだ早いが、少年と呼ぶにはやや遅い、その頃合を脱し始めたアンバランスな印象。おそらく、見た者誰もがひっそりと溜め息をつきそうなほどに整った容貌にきつさを孕み、彼は苛立たしげに言葉を紡ぐ。
「僕は、認めたくありませんね」
「あら、随分と頑なね」
それは、どこかからかうような声音だ。青年は憮然とした表情でそれを聞き流し、再び口を開く。
「彼女を、認めるんですか？」
「……それは、わからないわ」
軽やかに、少女は笑う。
それはとても楽しそうで、青年はわずかに表情を歪めた。
自分には、今の状況を楽しめる余裕など欠片もない。だというのに、余裕を見せ付ける少女の態度がひどく腹立たしかったのだ。

「どうせ、覚醒もしていない半端な存在よ。あれが使えるかどうかなんて、まだわからないことだわ」
「……では、何故、わざわざ姿を見せたんです？」
「面白そうだからよ」
当たり前のように即答され、彼は面食らったような表情を浮かべた。何かを言いかけたものの、それを忘れてしまったかのように口をつぐむ。そんな様子を見て、少女は更に楽しそうにくすくすと笑いを漏らした。
「ずっと退屈してたの。誰も、あの人を超えられない。でも、あの子は違うわ」
「その器を持っていると思うんですか？」
「わからないわ。でも、今までとは違うの。蒼樹が、そう言ったもの」
「……でも」
「そんなに不満？」
悪戯っぽい笑みを浮かべ、下から覗き込むようにして問いかける。
「そういう……わけでは……」
彼は答えに詰まり、少女の眼差しから逃れるように目をそらし、視線を彷徨わせる。
「まあ、わからなくもないわ。あの人との絆が一番深かったのは、あなただものね、イナミ」
「……その名前で呼ぶのはやめて下さい」
「ふふ、どうしようかしら」
少女は笑って、空中でくるりとターンした。短い裾が翻り、下穿きさえ見えそうだ。誰もそれを気にしないだろうとわかっていても、その仕草に苛立ちが芽生える。
もし、ここにあの人がいたら、はしたないと諌めるだろう。そして、不満そうにしながらも、少女はそれに従う。自分には、それを受け入れてもらう器は、ないのだけれど。
「ところで」

と、少女の全身を眺めやって、彼は眉をひそめる。
「その格好は何ですか」
イナミ、と呼ばれた彼の纏うそれとは、まるで意匠の違うものを少女は纏っている。そんなに短い下衣で足元が寒くないのだろうか、下穿きが見えないのだろうか、と余計な心配をしながら、そう尋ねる。
「高校の制服よ」
「それは、見ればわかりますよ。さっきの彼女の通う高校のもの、ですよね。ですが、何故、あなたがそれを？」
彼女は、高校生ではない。それどころか、人間ですらないのだ。そんな彼女には、この世界の年齢での分け方など、関係のないことでしかない。
なのに、わざわざそんなものを着る意味があるとは、とても思えなかった。
「高校生というものを、体験してみようかと思って」
「……はい？」
あまりにも唐突に、それでいてまるで当然のことのように告げられた内容に、彼は自分の耳を疑った。
彼女の行動が突拍子もないのは昔からだ。それに困らされたことも、一度や二度ではない。それは、知っている。経験として、充分に。だが、いくら何でも、そういう方向から話が飛び出して行くとは思わなかったのだ。
「嫌とは言わせないわ。大丈夫よ、簡単だから」
「か、簡単って、何が」
ずい、と詰め寄った彼女の大きな瞳に真正面から覗き込まれ、たじろぐ。
この眼差しに見つめられると、動けなくなる。動くことを許されないような、そんな気がしてくる。
それは、彼女が魅力的な存在であるというのもひとつの理由だが、何よりも、彼女の方が潜在的な力の資質において彼よりも上である

ことの方が大きい。圧倒的な力の差の前には、屈するしかない。
力を持つ者には、抗えない。そういうふうに、世界はできているのだ。
「資格を持つ者なのか否か、値するべき存在であるか否か、近くで見なければわからないでしょう？」
「それは、そうかもしれませんが……。わざわざ出向くようなことですか？」
「だって退屈だもの」
当然のように胸を張った答えが返って来て、彼はげんなりとした様子で溜め息をついた。そうだ、彼女はこういう性質だった、と改めて思い出したからだ。
「あら、何か文句でも？」
そんな様子を見て取って、彼女は聞く。その問いかけに何とはなしに不穏なものを感じるが、今は見なかったことにした。
「いえ、ありませんが」
「じゃあ、問題はないでしょ？」
少女はあっけらかんと言い放ち、にっこりと笑った。その笑みは眩しささえ感じさせるほどに明るいもので、彼女の本質をよく現している。
彼女はまるで太陽のようね、とあの人が言ったのは、正にその通りだ。一瞬でその本質を見抜いたのは、あの人がそういう存在であったからに他ならない。それは、世界の理の、ひとつだ。
「私はね、ただ、待つつもりなんてないの。待つしかないなんて、そんなのは嫌。私たちが再びこうして集うことができたのは、何か意図があるわ」
「……全てはあの人の意思、とでも言いたいのですか」
もちろん、それを否定するつもりはない。否定してしまえば、ここにいることそのものが否定されてしまう。けれど。
「さあね。そんなことは知ったことじゃないわ。あの人の意思なんて、関係ない。これは、私自身の意思よ」

以前から変わらぬ意志の強さを垣間見せ、少女はきっぱりと言い放った。
「だから、あなたも通うのよ」
「……は？」
「楽しみね！　じゃ、また明日、学校でね！」
人の話など何ひとつ聞いていない素振りで言い放つと、少女は姿を消した。
「え？」
後に残された少年はぽかんとして少女の消えた空間を見やり、わずかに首を傾げる。
「学校……？」
何の話だ、それは。
少女の残した言葉を自分の中で反芻し、その意味することに気づいて青ざめる。そして、自分に拒否権はない。彼女が自分たちの主格を務める以上、その言葉に抗うという選択肢は存在しないのだ。
彼女の言っていることは、わかる。
再びここに集うことが叶って、既に半年あまり。
その間に大抵のことは学習し、それなりの知識は身につけたとは思う。それでも、自分の知っていた世界とはまるで違ってしまったこの場所に対する、戸惑いは大きい。彼女はあっけらかんと受け入れて楽しそうに振る舞ってはいるが、自分には無理だ。だから、極力関わりたくないと思っていたのに。
「誰か、嘘だと言って下さい……」
かぼそくつぶやいた声は、誰に聞き取られることもなく宙にほどけて消える。あれだけ騒いでいながら、周囲を通り過ぎて行く人々が二人に注意を払うことはない。人々はそこに誰もいないかのように、その場を素通りして行く。
実際、誰もいないのだ。人々は、そこにいる彼らを認識しない。認識しなければ、そこには誰も存在してない。
人々の目に、彼らの姿は映らない。それは当然の規律であり、覆

されないものだ。
　彼らの姿を自然に視界に映すことができるのは、ごく一部の人間でしかない。それは、自然との対話を営みの中に取り入れたわずかな血統の持ち主であることが多く、彼らの多くは巫女や神官などと呼ばれた。
　そうでない場合も、ある。彼らが選び、決めた相手にのみ、彼らはその姿を晒す。だから、つい先ほど、桜と呼ばれた存在が少女の姿を見たということは、そのままその資格を彼女が有するということに他ならない。
　彼女は、あの人ではないのに。
　あの人は、とうにいないのに。
　当然のことながら、彼らは人間ではない。自然の力を源に生きる精霊である。
　いや、元々の彼らにはその概念はない。ただ、そこに在るから存在する。それだけのことだった。精霊という名を授けてくれたのは、かつての主だ。自然の気の流れを読み、彼らと対話する術を生まれながらに知っていたあの人は、おそらく、普通の人間とは少し違った存在であったのだろう。
　あの人は彼らと会話を交わし、その力を知り、そして、名前をつけてくれた。その声で呼ばれる名は心地よくて、心が浮き立つのを感じた。
　あの人のつけた名は彼らの本質を現し、その存在を縛る言霊でもあった。
　それでも、彼らはあの人を愛し、敬い、主と定めて従った。主が死して後もその魂の行く末を求め、悠久の時の流れの先にその救いを求めて眠りにつくほどに。
　眠りは、長かった。
　彼らの感覚からすれば、それは、あっという間のことだったのかもしれない。だが、目覚めた時に感じたのは驚愕だ。見知った世界とはまるで違う、見知らぬ光景を見せる世界。精霊などという概念

を、とっくに忘れ去った人々の群れ。かつて在ったあの場所では、その眼に彼らの姿を映すことはなくても人々はその存在を信じていたというのに。

「僕は、どうしたいのでしょうね……？」

答えなど、ない。

あるいは、最初から求めてなどいないのかもしれない。

あの人は、いない。

遠い昔に、あの人は失われてしまった。

ならば、何故、自分はここにいるのだろう？

『イナミ』

あの人が呼んだその名は、今もこの身を縛る言霊として在るのに。

果たされることのなかった約束はそのままで、それに縋って今もその面影を追いかける。決して得られないかもしれないのに、諦めきれない想いがそこにある。

イナミは唇を噛み締め、何もない中空を睨み据える。

そうしてから、軽く宙を蹴るようにしてふわりと空へ舞い上がった。

どこに行こうという当ては、ない。

どこに行ったとしても、同じことだ。何もすることはなく、何かをしたいという欲求もない。彼女のようにこの世界に興味を引かれるように気持ちを切り替えられたのなら、少しはよかったのかもしれないけれど。

当てもなく空を翔けながら、ただ風の導くままに宙を滑りながら、想うのは。

自分の名を呼ぶ、ただ一人の声。

遠い時の向こうに消えてしまった、たった一人の愛しい人の面影だった。

「頑固よね」
少女は空を見上げ、溜め息をついた。
それは決して呆れたものではなく、仲間を心配する響きを持って憂いを含む。
「仕方がないですよ。彼が、一番あの人と縁が深かったんですから」
割り込んだのは、軽やかに響く甘い声音。同じように憂いを抱いたその声に、少女は小さくうなずいた。
「でも、あの人はいないわ」
一瞬、相手は息を呑む。わずかな沈黙を挟み、小さな声でその先が続けられた。
「わかっていても、求めてしまうことは変わらないと思いますよ？私たちだって、同じですから。諦めきれない想いを抱えているんです」
「……そんなこと、今更言われなくてもわかっているわ」
わかっているからこそ、割り切れない彼の気持ちがわかる。けれど、失われたものは戻らない。そして、あの人はそれを惜しんで泣くことを喜ばない。
誰よりもそのことを知っているのは、彼のはずだ。
あの人の傍に在ることを選んだ時に、その時間は有限であることを知らされた。あの人と自分たちとの時の流れは違う。それをわかっていて、契約を結んだ。命ある限り、その血の流れに従うのだと。
誰一人として、そのことを後悔する者はいない。おそらくは、彼も、同じだ。
あの人との約束はかけがえのないもので、それを無碍にすることは絶対にできないことを知っている。あれから気の遠くなるような時間が流れたことも知っているけれど、あの人の残した言霊は今でもこの身に宿るのだから。
だから、苦しい。そして、切ない。

言霊は今も息づくのに、あの人はいない。
それでも。
「私たちは、目覚めた。あのまま、永遠に続く眠りの中にいるはずだったのに」
「それには意味があるんだと、思います」
「……彼だって、それを知っているはず」
知っていても割り切れないのだろう、と落ち着いた声音が続けた。その声音どおり、落ち着いた様子を見せる物静かな風貌の少年だった。
「あんたの言葉を疑うつもりはないわ、蒼樹」
「そう」
蒼樹、と呼ばれた少年は、さほど感慨を受けることもなくうなずく。それは、彼のいつものことであったので、緋月は気にする様子も見せなかった。
「だからこそ、私たちは決めなければならない。あの人との約束を守るために」
優しいあの声を、決して色あせることのない鮮やかな想い出を、見知らぬ誰かに奪われないために。
「風が吹きます」
少女の声が、穏やかに告げる。
ふと見上げた先に広がるのは、あの頃と変わることのない蒼穹。
「そうね」
「それは、新しい風？　それとも」
「わかりません。ただ、流れが見えます。今は、それしか見えません」
「……あの子は、そうなのかしら」
思い返して、ふと、つぶやく。
「彼女のことを、疑っているんですか？」
「疑いたくないわ。私は、感覚を信じてる。でも、違いすぎるから、不安になるの。私がそうなんだから、イナミはもっとそうよね」

「それでも、さだめの風は吹く。私たちの意志とは、全く別の場所で」

だから？　と、再び重ねて問うことはできなかった。

たとえその流れが本意ではなくとも、そこに定められたものがある限りは言霊に従う。それが、遥か時の彼方から受け継がれた、あの人との約束なのだから。

3

同じような夢を繰り返し見ることに気づいたのは、いつのことだっただろう。

それは、夢と言うほど曖昧なものではない。けれど、現実に似たものであるとはっきり認識できるほど、鮮明なものでもなかった。言うなれば、水のような透明な膜越しに映画を見ている、そんな感じだった。

そこにいる登場人物が誰なのかは、知らない。何かを話しているように見えるが声は明瞭には聞こえないし、透明な膜に遮られているようで表情もよくわからない。それでも、その光景は延々と続いている。まるで、桜に見せ付けるかのように。

そして、どこか懐かしく、ひどくもどかしい想いを抱えて目が覚めるのだ。

「……また、あの夢」

まだ夜も明けきっていない時間に目を覚ましてしまった桜は、ベッドに身を起こし、溜め息混じりにつぶやいた。

ちらりと時計に目をやれば、いつもよりもかなり早い時間帯を指し示している。だが、既に眠気などというものはどこにも見当たらなかった。

これは、いつものことだった。

その夢を見た時は、決まって朝早くに目が覚める。

いつもは妹が起こしに来るまで惰眠を貪っていたいのに、この夢を見た時だけは違った。家族の誰もが寝静まっている、白々と夜が明け始めたその時間に覚醒へと導かれる。まるで、そうあることが当然であるかのように。

何故、とその理由を考えたことがないとは言わない。

けれど、そんなことを誰に聞いていいかもわからなかったし、胡散臭い夢占いみたいなものも信じられなかった。ただ、自分の中に

ある感覚だけが全てだった。これがただの夢ではないと、自分は知っているのだ。

「どうして……？」

そして、その夢をきっかけに目覚めてしまえば、もう眠れないことは経験として知っている。かと言って、今から起き出しても早すぎる時間だ。

桜は少し迷った後、パジャマの上に上着を羽織ってベッドから降りた。

窓を開けたことに、特に意味はなかった。

何となく、朝の空気を吸ってみようとか、殊勝なことを頭の片隅でちらりと考えたのかもしれないが、その時にはそこまで考えて行動してはいなかった。何の気なしに窓を開けて明けかけた空を見上げ、桜は文字通り固まった。

人が自然にいるはずもない高さに、ふわりと漂うように浮いている人影を見つけたからだった。

それは、まさしく漂うといった言葉がしっくりと来る風情だった。特に力んだ様子もなく、ただ、風に任せるようにその人影はそこにいた。

昨日の下校時に現れた少女などよりも、もっと不可思議な光景だ。彼女は、見た目だけは普通に見えた。滅多に見かけないほどの美少女ではあったが、桜と同じ高校の制服を着ていて、桜の前に歩いて現れたのだから。多少浮いているように見えても、影がなくても、その光景はちょっと見ただけではおかしなものに見えるものではなかった。

けれど、そこにいた人影は違う。

ぼんやりと中空を見据え、膝を抱えて身体を丸めるように宙に漂うその姿は、どう贔屓目に見ても普通の人間には見えなかった。ありえないほどに整った容貌は、どこか人間離れした印象を与えていて、その身に纏うのは、やけに古風な衣装だ。神社にいる者が着ている装束に似てはいるが、少し雰囲気が違う。何が違うのかはわか

らない。
ただ、漠然とそう感じただけのことだった。
桜がその姿を目で追っていると、彼女からの視線に気づいたのか相手がこちらへと視線を向けた。
「あ……」
一瞬、その表情が嬉しそうに崩れかけ、けれど、すぐにそれは何かを飲み込むように気まずげなものへと変わった。
「あなたは、何なの？」
声に出して問いかけてしまったのは、自分でも思いもかけない行動だった。
相手は驚いたように目を見開いて、桜を凝視する。
それから宙でふわりと立ち上がり、空を滑るようにして桜の目の前まで移動して来た。
「あなたには、僕のことが見えるのですか？」
見た目は、桜と同い年くらいに見える相手だった。やけに整った顔立ちをした、青年と呼ぶには些か線の細いシルエット。
けれど、その眼差しはひどく冷たさを孕んで突き刺さる。顔立ちが整っているだけに、向けられる怜悧な眼差しは底冷えのするものとなってそこに在った。
明け方の冷えた空気がそこに重みを加えて、桜はその視線に気圧されるようにしてうなずいた。
彼は困惑したような表情を浮かべ、目を伏せた。
「……どうして」
長いような短いような沈黙の末にぽつりと落とされた言葉は、決して桜に向けられたものではなかった。何かに耐えるようにきつく引き結ばれた唇は、言葉を探すように小さく震えている。
桜はしばらく黙っていたが、それ以上相手が何も言わないことに焦れて口を開く。
「あなたは、昨日の人と何か関係あるの？」
「昨日、の……？」

桜の問いかけの意味が即座にはわからなかったのか、彼はぱちぱちと忙しなく瞬きを繰り返した。
「緋月って名乗った女の子よ」
「……ああ、彼女ですか」
くすりと笑って、肩をすくめる。
「気になりますか？」
「気になるわよ。あなたも、あの子も、どう見ても人間には見えないから」
「ふふ、見る目だけはあるのですね」
彼は笑って見せたが、それが楽しんでのものではないことは一目瞭然だった。どちらかと言えば、こちらバカにしたかのような笑みだ。
「は？」
そのことにムッとして、思わず返す声音はきついものになる。
「……僕たちのことに関しては、自ずと答えがわかるでしょう。あなたが、あなたであるのであれば」
まるで、謎かけのような言葉だった。
それは、桜の投げかけた問いに対して全く答えてはいないものだ。
「それは、答えになっていない……！」
「僕と彼女が関係者であるかどうかという問いに対する答えであれば、是、と答えましょう。けれど、僕たちが何者であるかということに関しては答えられません」
「どうして？」
「答えたくないからです。今は、まだ」
彼は迷いもなく即答した。
だが、そこに、ついさっまであった冷たさは少し和らいでいた。
少なくとも、桜はそう感じた。
「あなたが自ら知るのであれば、僕たちは約定を違えることはしませんよ」
「約定……？」

彼の言っている意味がわからなかった。それでも、どこか責めるような響きさえも含むその言葉は、桜の中に妙な重みを持って落ちて来た。その感覚は、ついさっきまで見ていた夢の中で味わったものにも似ていた。

「……あなた、誰？」

「その問いにも答えられません。いえ、やはり、答えたくない、と言うべきでしょうか。その答えをあなたに告げること自体は、おそらく禁忌ではありません。でも、僕は、そうしたくはないのです」

穏やかに告げられる言葉は、響きだけは優しく耳に滑り込んでくる。だが、それは、強固な意志の許に紡がれる拒絶の言葉でもあった。

桜は呆然として宙に浮かぶ相手を見ていたが、それを無視するように相手はふっと姿を消した。まるで、朝の空気の中に溶け込むかのように。

変な時間に目が覚めたうえに変な相手に遭遇したせいで寝不足の頭を抱え、桜はだらだらと学校へ向かった。学校までの道のりが、いつも以上に遠い気がする。教室に着いた時には、既に疲労している始末だ。

もう帰りたい、と思いながらも自分の席に向かいかけた桜は、そこに思いもよらない光景を目にして固まった。

教室の、自分の席の後ろ。昨日までは確かにそこにいなかったはずの存在が、当然のような顔をしてそこに座り、頬杖をついてぼんやりと周囲を眺めていた。その人物には、嫌と言うほど見覚えがあった。

忘れられるはずがない。昨日の帰り、桜に声をかけて来た少女だ。昨日の今日でもあるし、あまりにも突飛な邂逅であったことは否定

できない。そんな存在が普通に教室の机に座っていたら、驚くに決まっている。しかも、昨日までは何の気配もなかったというのに、だ。

立ち尽くして凝視していると、その視線に気づいたのか、少女が振り向いた。

「あら、おはよう」

当たり前のように朝の挨拶を返して来たが、どう考えてもこの状況はおかしい。

「どうして、あなたがここにいるの？」

「クラスメイトだもの、いるわよ」

「……はあ？」

昨日までは確かにいなかったはずなのに、いきなりクラスメイトを名乗られても困る。理解の範疇を超えている。桜が困っているのが楽しいのか、昨日、緋月と名乗った少女はにんまりとした笑みを浮かべた。

「どういうこと？」

一応周囲を気にしながら、声をひそめて問いかける。

「私は、あんたのクラスメイトよ。そういうことになってるの」

「そういうことって……」

「まあ、細かいことを気にしなくてもいいわよ。あんたが考えたって意味のないことだわ。考えるだけ無駄よ」

「あの、えっと」

どうやら、何らかの方法でもぐり込んだらしいが、何のためにそんなことをするのか疑問に思うところだ。どう考えても、彼女―緋月は人間ではない。そして、今朝、窓の外に浮かんでいた男も。

そういえば、と思い返す。

あの男は、緋月と関係があることを肯定していたはずだ。そして、人ではないことも否定はしなかった。答えられない、と言っただけだ。

「聞きたいことがあるんだけど」

「……何？」
「古風な着物を着た結構カッコいい男の人は、あなたの知り合いなのか？」
「彼に会ったの？」
緋月はそれに驚いたらしく、大きく目を見開いて桜を見つめ返した。
桜があの男と会ったことは、緋月の中では想定外のことだったらしい。しばらくそうしていた緋月は、妙にもったいぶった表情で溜め息をつく。
「どうして、そうなのかしら……？」
「ねえ、どういう意味？」
桜が問いかけたタイミングで、担任が教室に入って来る音がして、緋月はぷいと横を向いた。
今は、これ以上話すつもりはないのだろう。そっぽを向いて窓の外を眺めているその様子から窺う限り、真面目に学生をやろうという雰囲気は、全く見受けられない。何をしに学校にもぐり込んでいるのやら、理解しがたい。
わけのわからないことばかりだが、緋月にしても、あの男にしても、人間でないことは確かなのだ。
桜に自分たちの姿が見えることを不思議がっていたのだから、そういうことなのだろう。それにしては、普通に教室に溶け込んでいる辺りが疑問だが、人間ではないのなら怪しげな術なり何なりを使っていてもおかしくはない。出席を取られて返事をしている光景に、思わず自分の目と耳を疑いたくなってしまった桜である。
釈然としないながらも自分の席に座り、後ろから注がれる視線に居た堪れない想いを味わいながらも一日を始めることになったのだった。

その日は一日、授業は全く耳に入って来なかった。何度か当てられて冷や汗をかいたが、どうにか切り抜けた。
その要因は、当然ながら緋月の存在だ。それを思いながら、帰り支度をするわけでもなく頬杖をついて窓の外を見ている緋月を振り返る。
多少なりとも説明を求める権利くらいは、あるはずだ。
とは言え、緋月の態度を見る限り、桜が納得する答えを返してくれるとは到底思えなかったが、せめてもの抵抗だ。
「それで、説明をしてくれるつもりはあるの？」
「何を？」
「あなたが、こんな所にいる理由よ」
学校をこんなところ呼ばわりするのもどうかと思いつつ、そう問う。
すると、緋月は聞こえよがしにも取れそうな、わざとらしい溜め息をついた。
「面白そうだからよ」
「はあ？」
「それ以外に理由なんてないわ」
端的過ぎる。それが事実なのだとしても、もう少しオブラートに包んだ言い方というものがないのだろうか、と思わずにはいられない。
「それより、私もあんたに聞きたいことがあるんだけど」
「私に何を聞いたってたいした答えは出てこないと思うけど」
「彼に会ったんでしょ」
一瞬面食らったが、それが、朝の男のことを言っているのだと気づき、桜はうなずく。
「会ったと言うか、見かけたと言うか……。今朝、窓を開けたら空に浮いていたから」
「……へえ」

緋月はやけに楽しそうにも見える笑みを浮かべる。
「あんたには、彼が見えたのよね？」
「それ、あの人も言ってた。普通は見えないものなの？」
「私たちが意識して見せようとしていない限りは、見えないわ。そういうものなの。今は、見せようとしているから誰にでも見えているけどね」
「あなたたちは、何？」
「知りたい？」
大きな瞳を悪戯っぽく輝かせて、緋月は下から桜を覗き込むようにして笑う。
その表情はやけに魅力的なもので、緋月が普通の少女ではないことを知っているのでなければ、素直に心臓が鼓動を速めたに違いない。相手が同性だとわかっていても、それは変わらなかった。
だが、緋月は普通の少女ではないのだ。
彼女が何者であるのか、何のためにここで高校生の真似ごとをしているのか、わからないままではうっかりときめくこともできない。いや、わかったとしても、彼女と関わると何となく苦労しそうではあるのだが、とりあえず、外見だけの話である。
「そりゃ、あなたにしても、朝の人にしても、謎であることは確かでしょう？」
「……あんたは、何も知らないのね」
「何の話？」
「ううん、何でもないわ。そうやって聞き返す時点で、知らないってことよね」
自分から話を振っておきながら、自分で勝手に納得してうなずいている。桜の話など、最初から聞く気がないようにしか思えない。
「私の話はまだ終わっていないんだけど……」
「ああ、そうだったわね」
全く悪いとは思っていないであろう様子で、緋月は桜に向き直った。

「とりあえず、行きましょ。ここじゃ……ね」
既に教室内に残っている生徒は少なくなっているが、それでも、いないわけではない。どんな話であれ、他の人間に聞かれて都合がいいものであるようには思えない。緋月や朝の男が、普通の人間ではないのであるのなら、当然のことだ。
「行くって、どこへ？」
「ついて来ればわかるわ」
そのまま、桜の返事を待つこともなくさっさと歩き始めた緋月の後を追い、桜は慌てて彼女に並ぶ。何かを話しかけて間を持たせようかとも思ったが、何となく気圧されてしまって口を開けずにいた。
謎だ。謎過ぎる。
昨日から、妙なことが多い。桜の周りでは、おかしなことが起きすぎている。
放課後に感じた変な視線のこともそうだし、いきなり現れたこの緋月という少女もそうだ。おまけに、朝っぱらから空中散歩中の男と遭遇までしてしまった。ついでに言えば、二人とも最初から桜のことを知っていたふしがある。これを、おかしなできごとと言わずして何と呼べばいいのだろう。
緋月が向かったのは、特別教室などが入っている棟だ。特に授業で必要がなければ、縁のない場所である。緋月の目的の場所は決まっているのか、その足取りに迷いはない。ひとつのドアの前で立ち止まると、誰かの在室を確認することもなくドアを開けた。
「来たわよ！」
勝手知ったる、といった様子でずかずかと中に入って行く緋月を見てから、桜はその部屋の入り口にある表示を見上げる。そこのプレートには資料室とあるが、ちらりと見えた中はほぼがらんどうだ。
あるのは、会議机と数脚のパイプ椅子。
無許可で使ってもいい場所なのだろうか、と思うのだが、緋月はまるで頓着していない様子だ。
「何やってんの、早く中に入ってドアを閉めてよ」

入るのに躊躇している桜を振り返り、緋月が苛立たしそうに告げた。
「……え、あ、うん」
今ひとつ事情を理解しきれないまま、桜はドアを閉める。そうしてから、ようやくその部屋の中に緋月以外にも二人の生徒がいることに気づいた。一人は女子生徒で、もう一人は男子生徒。共に同じ高校の制服を着ている。
見覚えはないが、緋月同様に滅多に見かけない美少女だと、アイドルにでもいそうな涼しげな美貌の少年。
この学校の制服を着ているということは生徒なのだろうと思うが、緋月がああである以上、それを頭から信じることはできなかった。
「どういうこと？　こんな場所に私を連れて来て、何の意味があるの？」
「意味はないわよ。ただ、人に聞かれたらあんたが困るって、静流が言うから」
「はあ？」
「別に私はかまわないって思ったんだけど」
説明する気があるのかないのか、緋月の言葉は投げやりだ。ここまで連れて来ておいて、と苛立ちさえ覚える。
「あ、あのぅ」
そこで、最初から部室の中にいた二人のうち、少女の方がかぼそく声を上げた。緋月とはイメージのまるでかぶらない、あどけない印象を与える少女だ。同じ美少女という言葉で括っていても、緋月とはタイプが違う。男女の区別はともかく、何となく守ってあげたいような印象を抱かせる。そんな相手から縋るように見つめられてしまうと、桜は緋月に抱いた苛立ちがわずかながらも消えていくというものだ。
「その、私たちは、こちらが意識して見せようとしない限りは、普通の人間の目には映らないんです。でも、あなたは違うから。普通の人間だし、もし、変なふうに思われちゃったら困るし……」

「それは、私が緋月と話しているつもりでも、他の人間には私が独り言を喋っているように見えるかもしれない、ということ？」
「そ、そうです」
「別に、人の目なんか気にしなけりゃいいじゃない」
緋月は何でもないことのように言い放ってくれたが、桜としては、さすがにそういう事態は避けたい。緋月と交わした会話はさほど多くはないが、彼女が相当に我の強い性格であることはわかろうというものだ。
もし、この少女の言葉がなければそういうことになっていたのかもしれないと思うと、ありがたい。
「あなたはそれでいいかもしれないけど、私は違うわよ」
「小さいことを気にしたらだめじゃない」
「小さくないわよ！」
一人で何かと話している変人と思われるのは、あまり嬉しくない。桜が憮然として言い返すと、緋月は不服そうに口を尖らせた。
その態度に腹立たしさを覚えもしたが、今更、何も聞かずに帰るのはもっと癪だった。
緋月の言葉を信じるのなら、おそらく、この二人も人間ではないのだろう。朝の男も含めれば、四人。人間ではない存在が集合していることになる。
どういう理屈だ。
頭痛がして来そうだが、これが現実だ。昨日からこんなことの連続で、何かがおかしいのは確かなのだ。
「私たちは、人間ではありません。たぶん、彼女から聞いていると思うんですけど……」
「それは、聞きました。私には、あなたたちは人間にしか見えませんけど」
その言葉は、本音だった。
緋月にしても、最初のことさえなければ、風変わりなクラスメイトくらいの認識でしかなかっただろう。

どういう方法を使ったのか知らないが、緋月はクラスの一人として普通に存在していた。佐山や他のクラスメイトにそれとなく聞いたところ、四月から同じクラスだと言っていたから驚きだ。昨日までは存在していなかったはずの生徒を、何故か知っていると言うクラスメイトに、ちょっとした恐怖にも似たものを覚えたのも事実だ。

そんなことができる力を持っているのだとしたら、たとえ人間だったとしても、正直、得体が知れない。

だが、緋月を疑う気になれなかったのも事実だ。何故だかはわからない。口調や言っていることはどうかと思うものの、緋月からは敵意を感じなかったからかもしれない。そして、それは、緋月以外の二人の少女からも同じだった。

ただ、朝の男は別だ。あの男からは、かすかにではあったが桜に対する敵意にも似たものが感じられた。

「見た目は、たぶん、あなたと変わらないと思うんです。でも……」

あどけない表情を緩ませて、少女は笑う。

「証拠を、見せますね」

そう言ってすっと上げた彼女の手の指先から、きらめく何かが零れ出る。一瞬、それが何であるかわからずにぽかんとして見ていた桜だったが、すぐにそれが水の流れであることに気づいてぎょっとする。

彼女の指先から零れ落ちた一筋の水の流れは、空中で静止して複雑な文様を描く。それが人間の力で為せる業ではないことは、一目瞭然だった。

「私は、静流です。水を司る力を与えられています。それから……」

「蒼樹。属性は地」

それまで言葉を挟むことなく立っていた少年が、抑揚なく告げる。それに割り込むようにして、緋月が口を開いた。

「で、私が緋月。見ればわかるわよね」

「わかるって、何が」

「ああ、もう、鈍いわね！」

「あなたのその説明では、理解は難しい。彼女にその知識は乏しいのだから」
苛々とした様子を見せる緋月に、またしても少年—確か、蒼樹と名乗っていた—が言葉を挟む。
「でも、私、そういうのって苦手なのよ。静流、お願い」
「ひえっ、わ、私だって無理ですうう」
「……」
三者三様に押し付けあって、埒が明かない。しばしの押し問答の後、ほとんど口を開かなかった蒼樹が進み出た。
「あなたがすぐにわかるように説明するのは、難しい。それでもいいか？」
「……うん」
どんな話が出て来るにしても、何も聞かなければ理解するもしないも判断はできない。そもそも、ここに連れて来られている以上、既に巻き込まれているのだから、説明をしてもらう権利はあるはずなのだ。
蒼樹はあるかなしかのごとくにわずかにうなずいて、再び口を開いた。
「あなたが今までの流れで考えている通り、私たちは人間ではない」
桜がうなずくと、彼女はそれを確認するようにちらりと視線を動かした。
「あなたの理解できる言葉で言い換えるのでなら、精霊という言葉が妥当。私たちは、自然のもたらす力を糧にして生きている存在だから」
彼の説明を要約すると、彼女たちは、かつて、地、火、風、水の四精霊と呼ばれていた存在なのだと、そう言った。
にわかには信じ難い話だ。
だが、彼女たちが人間ではありえないことは肌で感じている。そのうえで、力の片鱗を見せられてしまえば、信じるより他にない。
信じたくなかろうが、彼女たちは人間ではないのだ。その言葉を

信じるのであれば、精霊ということなのだろう。
「で、その精霊とやらが、私に何の用なの？」
「あなたは、私たちを統べる巫女の血を引いている」
「……は？」
咄嗟には告げられた言葉の意味がわからず、桜は目を瞬かせた。
「何の話、それ」
巫女とは何だ。そう言われて最初に思い浮かぶのは、神社にいるアレである。だが、そうだとしても、自分の家は神社とは縁もゆかりもないはずだ。なのに、いきなりそんなことを言われても受け入れられるはずがない。
「私の家は神社じゃないわよ」
「厳密に言えば、そういう意味での血脈ではない。魂の流れとか、そういう意味での血脈になる。あなたの家の血統を辿って行けば、もしかしたら本来の流れに辿り着くかもしれないが、それはさして重要なことではない。大切なのは、魂に刻まれた古の記憶」
何のことやら、意味がわからない。
それでも、彼が本気でそれを言っているのだということは伝わって来た。そう感じているから、桜は冷たい反応を返すこともできない。だが、そんなことを言われても、実感などまるでないのだ。
「今すぐに、あなたにそれを信じてもらおうとは思わない。あなたにとって、私たちの存在は異質。そして、この世界にとっても。……でも」
やけに真剣な眼差しで桜を見据え、彼女は言った。
「あなたの魂がそこに在る限り、あなたは狙われる。現状、危険なのは、あなただ。このまま放置しておけば、あなたは遠からず殺されるかもしれない」
「はあっ！？」
迷うことなくあっさりと告げられたのは、あまりにも容赦のない言葉だった。

4

遠く、遠い、昔。神や精霊と呼ばれるものが、今よりも人々の身近に在った頃。

彼らは、自由だった。他の何者にも縛られることなく、ただ、自然の息吹と戯れて過ごした。それが、当たり前だった。人の世の時の流れは、彼らには関係のないものでしかない。自分たちには関わりのない場所で、忙しなく流れていく人の世を眺めていることは、楽しみのひとつでもあった。

人の世の移り変わりは、面白い。

時の流れとは無縁の彼らにとって、一瞬のものだった。瞬く間に命の火を燃やし尽くして消える人の生き様は、興味深いものに過ぎなかった。

だが、積極的に関わることはしない。人の祈りに応えて力を貸すことは稀にあったが、それは、ほとんど気紛れによって為されるものであり、彼らにとっての人とは暇つぶしの材料でしかなかった。

そうして気儘に過ごしていた、いつかの季節。退屈を持て余していた彼らは、彼らの運命を変える人と出会った。

彼らの生きて来た意味も、それから先の全ても、まるごと変えてしまったのは、たった一人の人との出会いだった。

その人と遭遇したのは、偶然のできごとに過ぎなかった。彼らも、その人も、近づこうという意図を持ってそうしたわけではない。

その人と出会った場所は、人の世では神域と呼ばれる森の近くだった。

もちろん、それは人の世での呼ばれ方であって、精霊である彼らには関係のないものだ。それでも、神の息吹を感じられるその場所は、彼らにとって居心地のいい場所だった。神はそこにいることを、はっきりと感じさせる空気に満ちていた。

人間がどう感じているのかは、知らない。だが、その周辺が神域

と呼ばれ、奥深い場所には滅多に人が分け入って来ないことから考えると、畏敬の念を抱いているのかもしれない。だから、そこに人が来ることは稀だった。

それゆえに、だったのだろうか。

鬱蒼と生い茂る木々に紛れて近づいて来たその影に、すぐ傍に近づかれるまで気づかなかったのは。

何故気づかなかったのか、今でもわからない。今思えば、あれは、必然だったのかもしれない。あの人と、この力の全てを捧げてもひとかけらの後悔も抱かぬほどの魂と出会ったことが、ただの偶然であるはずがなかった。

その人は何の案内もなく、森から出て来た。鬱蒼と茂る森は昼でも薄暗く、道を知る者でなければすぐに迷ってしまいそうな様相を見せる。だというのに、その人は迷うことなく歩いて来たようで、たいして疲れた様子もなく、おまけに森を歩くには不向きすぎる軽装をしていた。

森が開けたそこには、澄んだ水を湛えた湖があった。その湖は彼らのお気に入りの場所で、年頃の人間の姿を取っての水遊びは珍しいものでもなかった。

いきなり何の前触れもなく現われた人間に、仮初のの姿のまま精霊たちは固まった。

少年の姿を取る精霊は仲間を庇うように咄嗟に警戒の構えを取ったが、相手の敵意のなさに次の行動をどう取るべきか選びあぐね、やはり固まったままだ。

「……やぁだ、水音がするから何かと思えば、精霊の水遊びだったのね」

邪魔をしてごめんね、と、屈託のない笑顔で言って、その人は水辺に腰を下ろした。

拍子抜けした、と言ってもいい。

彼らがいることを訝しく思うでもなく、それが至極当然であるかのように振る舞い、そして、そのことをさして気にしてもいない。

その上で敵意も何もなく、こちらを警戒することもない。のんびりとした調子で水の中を覗き込み、魚を見つけたと言って嬉しそうな声を上げた。

一体、何の目的でここに来たのだろう。何とも言いがたい微妙な空気に、彼らは困惑した。

そもそも、普通の人間には、彼らの姿が見えるはずもない。

彼らはごく自然にそこに在るが、人々はその存在を感じることはできない。それでも、人々は彼らの存在を信じ、敬い、彼らに祈る。豊穣を。安寧を。それらの願いの全てを、彼らが叶えられるわけではない。彼らは神ではないし、持てる力には限りがある。そして、たとえ神であっても、人の世に過度に干渉することは不可能なのだ。

人の世は人のもの。精霊はそこに干渉はしない。それが、決して犯してはならない規律。

そうは言っても、生来、彼らは好奇心が強い。突然神域に現れたその人に興味を引かれることは、当然の流れだった。人に関わることそのものは、決して罪ではない。人の世の流れに手を貸すことが、禁忌であるだけだ。

その人は、数日に一度、その水辺に現れた。

いつ来る、という明確な決まりごとはない。二日続けて来ることもあれば、数日、音沙汰がないこともあった。そして、ここに来て何をするというわけでもない。最初は、糧として魚を獲るのかと思っていたが、そういう気配もない。

ただ、水辺でぼんやりと時を過ごし、時折、魚にちょっかいを出して水と戯れる。彼らが見ていようが見ていまいが、その行動は変わらなかった。

不思議だった。

何者なのだろう、という疑問は、少なからずあった。

精霊の姿を見ることのできる者は、限られる。それは、選ばれた巫女の血統を受け継ぐ者であることが多い。祭祀を司り、神々の声を聞く役目を務める者がそれに当たる。この場所は神域に近く、神

職にある者がいてもおかしくはないが、そういった者は外出を制限されているのが常だ。
その人は、そういったしがらみとは無縁に見えた。
けれど、神職と関わらないのだと断じてしまうには、その気配は徒人にしては色がなさ過ぎた。俗世とはかけ離れた気配を身に纏いながら、それでいて、正式な巫女とは言えないその存在は不可思議であり、中途半端な印象さえ受けた。
お互いに存在を知っていながら、無関心を装った。その距離を保ったまま、どれだけの時が過ぎただろう。
それは、最初に会った時から、季節をふたつほど越えたくらいだったかもしれない。
ついに我慢しきれずにその人の前に舞い降りたのは、彼らの中での主格を務める、少女の姿をした精霊だった。
火の属性を持ち、火の姫と呼ばれる彼女は彼らの中で最も気が短く、我の強い性質を持っていた。こちらを関知しているはずなのに綺麗に無視をするその人に、苛立ちにも似た感情を覚えていたのは彼女だけではなかったが、そうやって行動に移したのは彼女が彼女であったがゆえだろう。
「ねえ、あんた、何者なの」
相変わらずのんびりとした様子で流れの中に遊ぶ魚を覗き込んでいたその人は、彼女の誰何の声を聞いて顔を上げ、にやりと笑った。
「……私の勝ちね」
「えっ」
それは、全く予想もしていない反応だった。面食らってその先を続けられずにいる彼女にかまうこともなく、その人は先を続けた。
「さて、どちらが先に痺れを切らすか、私としては我慢比べのつもりだったんだけど」
あなたの負けね、と、初めてここに来た時と同じ、屈託のない笑顔を浮かべ、その人は言ってのけた。
つまり、その人は、彼らが我慢できなくなるのを待っていたのだ。

何かをするわけでもなく、のんびりと。
そのことに驚いて、腹が立って、なのに、怒る気にもなれなかった。
負けた、と思ってしまったからだ。
元来、精霊たちは好奇心が強い。だからこそ、気紛れで人の世に関わろうとする。それゆえの禁忌が存在するのだ。精霊は人に深く関わってはならない。それは、この世の均衡を崩すものとなりかねないからだ。
それらの全てをわかった上で、その人はふたつの季節を待ち続けていたのだ。人の持つ時の流れが精霊のそれよりも短いことを思えば、それは驚くべきことだった。
「な……っ、あんた、わかって……！？」
「そりゃあ、そうよ。あれだけ興味津々に物陰から覗かれていれば、よほど鈍くない限りは気づくと思わない？　私は、これでも巫女の血統を受け継ぐのよ？」
さも当たり前のように言うが、そもそも、精霊を見ることができる者が少ないことくらい、その人だってわかっているはずだ。その言葉は、その人がそういう環境に当たり前のようにいる、その証でもあった。
「最初からわかっていて、私たちを無視していたってこと！？」
思わず叫んだのは、怒ったと言うよりも、単にからかわれているらしいことに対して、何とも言えない気恥ずかしさがこみ上げてきたからだ。こちらが気配を消して窺っていたつもりだったというのに、向こうはわかっていたというのだから、そう思っても無理はなかった。
「別に、無視していたわけじゃないわよ」
と、その人は笑う。
その笑みに、何だか毒気を抜かれる。
「精霊と人は、関わらない。その方がいいでしょう？　それが、世の理というものよ。それでも、言葉を交わすくらいなら許されるわ。

たとえ、私のような半端者でも、ね」
「半端者……？」
首を傾げて問い返せば、そうだよ、と、その人は寂しそうな表情になった。
そして、内緒話だから、と言って、秘められたその生まれを教えてくれた。
神域の巫女を母に、都の高名な人を父に。
決して生まれてはならない、人の世では認められることのない存在であることを。それでも、父と母は愛し合っていた、だからここに私がいるんだよ、と、語るその声は優しかった。人の交わす愛の何たるかを、精霊たちは知らない。理解できない。それなのに、その人の語る父と母の物語はとても魅力的に思えて、精霊たちはその想いに憧れた。
父たる人は無実の罪で処刑され、母たる人はその咎を問われて巫女の任を解かれ、既にその身はこの神域からは遠い都に在った。傍らに父も母もなく、都の政とは関わることもなく、ただ、幽閉も同然に生かされているだけの日々。それでも、こうやって、一生を穏やかに過ごして行くのだとその人は言った。
半ば幽閉に近くても、父と母の身分ゆえに存在すら秘匿するしかなく生かされているだけであっても、ひとたびこの世に生を受けたなら、と。
その想いに、その孤独に、それでも溢れてくる彼女の優しさと穏やかな心に焦がれ、想いを傾けた。
そして、それは、自然の理の中に生きる精霊である彼らが初めて知る、思慕の情だった。
互いに話すことは他愛もないことで、その人から何かを求められたことはなかった。人は祈り、何かを求めることが当然だと思っていたのに、その人は何も望まなかった。何か望むことはないのかと尋ねれば、何もないよと穏やかに答えた。
望むものも、求めるものも、そこにはない。

ただ、穏やかに流れる時があるだけ。
それは、心地のよい場所であり、時間の流れだった。無理難題を祈られ、それが叶わぬと知って嘆きと怨嗟の声を上げられることもなく、その人と過ごす時間は穏やかに優しく甘くそこに在った。
夏の太陽の下で水と戯れ、秋の実りに感謝しながら大地に寝転び、冬の風に舞い散る雪の美しさに声を奪われ、春の訪れに緑の息吹を感じて歓声を上げた。
季節の移ろいがそれほどまでに美しく、心を動かされるものだとは、それまで知らなかった。彼らにとって自然とは自らの力の源であり、そう在って当然のものだったからだ。それらが牙を剥き、襲いかかることなどありえない。そこに、人と精霊との相容れない圧倒的な違いがあるのだ。
人が自然に対して抱く喜びの、恐れの、その意味を教えてくれたのは、その人だった。自然に対して人が祈り、嘆き、歓喜する、その意味。それを知るだけで、世界は色鮮やかに姿を変えた。
その人の言葉で、その人の存在がそこに在るだけで、何もかもが変わった気がした。
そうして過ぎて行く時間以外に望むものなど、何もなかった。なのに、それだけでは足りなくて、力の全てを捧げたいとねだれば、その人は困ったように笑った。
「困ったわね。私は、そういうつもりであなたたちと関わったわけじゃないんだけど」
「でも、私たちはあんたのために力を使うのを躊躇わないわ。それは、駄目なこと？」
「……駄目ではないわ。でも、その必要はないのよ？」
この地は、こんなにも穏やかで、平和なのだから。人の持つべき力を凌駕する精霊の力を使ってまで為したいことなど、何もないのだから。
「じゃあ、せめて、言霊で私たちを縛って。あんたのため以外に力を振るうことができないように。あんたの言霊で、私たちを眷属に

して」
躊躇うその人に、どうしてもと食い下がる。力を捧げることを望まれないのならば、せめて、その命のある限りは付き従うことを誓いたかった。
「……では、あなたたちに名前をつけてあげる」
重ねられる懇願に、折れたのはその人の方だった。苦笑しながらも、名前を授けて言霊で縛る誓約を交わすことを了承してくれた。
名は言霊。名は縛り。それが、誓約を捧げる相手から授けられたものであるのなら、それは彼らの全てを支配する。
精霊である彼らに、人から呼ばれるための名はない。本質を顕す名は持っているが、それだけのことだ。人は、彼らの名を呼ぶ術を持たないからだ。
幾度となく懇願に負けて、その人は名を授けてくれた。人の言葉で彼らの本質を置き換え、優しい声で名を呼んだ。それは、彼らを縛るためのものではない。護るための名であり、共にあるための名だ。授けられた名を呼ばれるだけで、それは、至福の時だった。優しく穏やかに過ぎる時間は、そうして積み重ねられて行くのだと信じて疑わなかった。
けれど。
別れは、突然にやって来た。
人と精霊との時間の流れは違う。いずれ永劫の別れが来るであろうことは、最初から知っていた。それでも、それほどまでに早くその時が訪れるとは、誰一人として考えてはいなかった。
穏やかに過ぎて行くであろう時間を壊したのは、やはり人の世の都合だった。
俗世を離れ、幽閉に近い状態で神域に閉じ込められていたその人を、都の人々は恐れた。何の力も持たず、何を望むわけでもなく、ただ自然のもたらす理のままに生きて行くことだけが望みだったその人を、咎人の血を引くというだけの理由で罪とした。生きていることさえも罪だと、何の根拠もなく決め付けた。その咎でさえ、陥

れられた結果のものであったというのに。
「呼んで下さい……！　我らの名を！　我らは、あなたのためであれば全ての力を捧げても悔いはないのです！」
切り立った崖の上に追い詰められ、進むことも戻ることもできずに佇む影に向かい、声を限りに叫ぶ。狩りの獲物のように追い立てられ、血と汗と泥にまみれても尚、その姿は美しく聡明で、その唇は笑みを忘れてはいなかった。
名を授けられ、その名の持つ言霊によって縛られた身では、力を自在に振るうことはできない。それを望んだのは自分たちではあったけれど、彼女の危急の時にすら呼ばれないのであれば、何の意味も為さないことに気づいた。
そのことが悲しくて、悔しくて、そして、それ以上にこんなことを引き起こした人の世が憎かった。
差し伸べた、手。たった一人のために捧げた、言霊に縛られる誓約。そのことを悔いるつもりはない。悔いるくらいなら、最初からそんなことは望まない。彼の人こそ、全てを捧げるに値する人であったことを疑ってはいない。それでも。
望まれないのなら、彼の人の命を救うこともできないのなら、その誓約にすら意味はないというのに。
「あなたが望むのなら、この国の全てを滅ぼしてもかまわないのに……！！」
血を吐くような叫びに、いつもと同じ、穏やかな笑みが返された。
「駄目よ」
たった一言、そう告げる。
何故、と、声にならない嘆きが零れ落ちる。こんな結末を見るために全てを捧げたわけではない。穏やかに笑って、死出の旅路に飛び込もうとする人を、見たかったわけではなかったのだ。
ただ、笑うあの人の傍にいたかっただけだ。あの優しい声で、名前を呼ばれたかった。笑ってくれるのなら、その声が聞こえるのなら、それでよかった。それだけだった。

なのに、人が、それを奪う。
幸福を、安らぎを、安寧を。ただ、そこに生を受けたという、それだけの理由で。
そんな国など、滅ぼしてもかまわない。あの人のいない世界など、失われたってどうでもいい。たとえ、それが国を守護する神を敵に回す大それたことであろうとも、授けられた名に懸けて命を削ることも厭わないのに。
「人に害を為すことに、あなたたちの力を使ってはいけない。たとえ一時の激情で為したことであったとしても、いずれそのことで傷つくのは、あなたたちなのだから」
どこまでも優しくて悲しいその言霊は、自らの命の終わりを前にしても、揺らぐことはなく。
「……愛してるわ」
その先の言葉は、吹き抜ける風の音に紛れて聞こえなかった。唇だけが動いて、ひとつの名を刻む。
聞こえない。何と呼んだのか、風の音に紛れて、何も。
……いや、知りたくなかった。
その声が、言葉が、最期と思い知らされたくなかった。
「あ……っ」
自らを縛る言霊の鎖を引きちぎり、空を駆ける。その命を繋ぎ止めたくて、失いたくなくて、そのためならば逆らうことの苦痛など何も怖くなかった。
目の前で、彼の人の身体が、ぐらりと揺れた。何をするのか、止める言葉を叫ぶ隙もなくその爪先が地を蹴り、激流の中にその身を躍らせる。
「あ……あっ、あああああっ！！」
「嫌――……！！」
水守の少女が、我が身の危険も省みずにその姿を追って流れの中へ姿を消す。けれど、彼女の支配下にはない激流はその願いを撥ねつけ、何もかもを押し流して行く。

伸ばした手も、迸った悲鳴も、何も、届かない。激流の中に消えた人は、二度とその姿を見せることはなかった。

5

「……っ！！」

桜は自分が上げた悲鳴に驚いて飛び起きた。

心臓が恐ろしいほどのスピードで脈打ち、恐怖にも似た震えが身体の内を走り抜ける。

荒く息をついて、そこが自分の部屋のベッドであることを知る。たった今感じた恐怖が夢であったことに安堵し、再びそれを思い出す感覚に身を震わせた。

それは、いつもの夢だった。だが、今までは薄い水の膜を通した映画のように見えていたものが、変わっていた。桜はその映画の登場人物となり、その痛みや喜びを自分のものとして感じていたのだ。

こんなことは、初めてのことだった。今までは、どんなに知りたくともその詳細を見ることはできなかった。だというのに、あまりにも鮮明に脳裏に焼きつくその夢の残滓に、束の間、夢と現実との境目がわからなくなる。

リアルすぎて、吐き気がしそうだ。

汗ばんだ額を手の甲で拭い、深呼吸を繰り返す。

全ては夢なのだと言い聞かせなければ、境界線が曖昧になって夢に飲み込まれてしまいそうだった。

「何、今の……？」

わからない。

ただ、何かが変わろうとしている。それは、誰かに教えられるでもなく身体の奥で感じる予感だった。

時計を見れば、まだ早朝だ。この夢を見た時の常として、夜明け頃に目が覚める。今日も同じだったらしい。だが、二日連続でこの夢を見るのは初めてのことだ。

いや、厳密に言えば、同じ夢とは言えないのかもしれない。今日の夢は、今までのものとは明らかに様子が違っていたからだ。これ

までのどこかぼんやりとしたイメージから一転して、生々しいほどに刻み込まれた夢の中の風景は、まるで現実に起きたできごとのようにも思える。追い詰められ、激流に身を躍らせた瞬間の身を切り裂くような強い風の音が、今も耳に残っているようだった。

ぶるりと頭を振って、夢の名残を追い払おうとする。

嫌な汗でべたつく身体が不快だが、この時間にシャワーを使うのも家族に迷惑だ。この目覚めがいつもの夢のもたらすものと同じであれば、この先はどうあっても眠れないはずだ。二日連続でこれとは、全くもってついていないと言うべきか。

溜め息をついて、ベッドから降りる。

着替えるかどうか迷って、後でシャワーを浴びてからにしようと思い直した。そうしてから、何となく予感を覚えて窓に歩み寄る。

何故だか、昨日と同じように、あの男がそこにいる気がしたのだ。

迷うことなくカーテンを引くと、驚いたようにこちらを見ている男と目が合った。その驚いた様子からして、桜が起き出して来て窓を開けるとは思っていなかったのだろう。

「……ねえ」

躊躇わずに窓を開けて、空中で立ち尽くすようにしてこちらを見ている男を手招きする。その様子はあまりにも頼りなげで、どこか寂しそうで、放っておけないような気がしてならなかった。

「そんな所にいるんだったら、中に入って来たら？」

「何故ですか」

わずかに棘のある返答は、昨日と変わらない。だが、それを不快だとは思わなかった。

「私が気になるから」

早くして、と急かせば、不承不承といった様子で彼は降り立った。改めて近くで見ると、無駄に整った顔立ちであることに気づかされる。いきなり学校にまで乗り込んで来た緋月たちと言い、精霊というのは人間離れした容貌の持ち主らしい。

「何か御用ですか」

「それを聞きたいのはこっちの方なんだけど」
「……僕には、あなたに用事などありませんが」
「じゃあ、どうして、こんな時間に私の部屋の前にいるの？」
「それは……」
一瞬言葉に詰まり、それから、ぼそぼそと先を続ける。
「散歩です」
無理のある言い訳だということは、おそらく、本人もわかっているのだろう。桜からの視線から逃れるように目をそらす辺りがそれを現している。
「散歩ねぇ……」
思わず半笑いになると、ムッとした表情で睨まれた。
無理があることはわかっていても、それを指摘されるのは気に入らないらしい。その刺々しい態度にどこか懐かしささえ覚えて、桜はうろたえた。
何故、そんな気持ちを抱くのかわからなかった。
「……顔色が、悪いですね」
ぽつりと、つぶやくように言葉が零れ落ちる。
変な夢を見たせいだ。それはわかっている。だが、それにこの男が気づいたということが、不思議だった。
「え？　ああ……その、夢見が、悪くて」
「夢……？」
その眼差しが、ほんのわずかだけ心配そうな色を乗せる。
「昔からよく見る夢なの。今日は、今までとはちょっと違ったから驚いただけ」
「違った、のですか……？」
「うん、そう。いつもはぼんやりとしか追えなかったストーリーが、いきなり鮮明になった感じかな」
思わずぺらぺらと事情を話してしまう自分を、不思議に思う。
そのことに意味があるのか、何が理由なのか、わからない。そもそも、あの夢を繰り返し見ること自体が不思議なことではあるのだ。

「どんな夢ですか」
「それは……」
説明しようと口を開きかけ、ふと気づく。この男の声を、夢の中で聞いたような、そんな気がしたからだった。
「あなた、名前は？」
思いつきのように尋ねると、はっとしたように身構えられる。その質問は、あまり歓迎できないものだったのかもしれない。だが、今更、口に出してしまったものは戻らない。
「何故、そんなことを聞くのです？」
夢の話で少しだけやわらかくなっていた態度が、再び頑なな様子に取って代わる。何がそれほどまでに気に入らないのか、桜にはまるで見当がつかなかった。名前を聞いたことがそれほどまでに不愉快なのか、と考え、それが先ほどの夢の中に出て来た最後の叫びを思い起こさせる。
名前を呼んで欲しいと、そう、悲痛な声で叫ぶ誰かの声を。
……あれは、一体、何を示しているのだろう？
「……ううん、緋月たちの仲間だと聞いたから、あなたにだって名前があるんでしょう？　そう思っただけよ」
「彼女から聞かなかったのですか？」
「聞いてよかったの？　何となく、そうしない方がいいような気がしたんだけど」
それは、別に何か意図していたことではない。ただ、何となくそうしただけだ。緋月はその場にいる少女たちの名前を明かしはしたが、この男については『彼』としか言っていなかった。とは言え、それについて深く考えたわけではない。
そこに、何か意味があるのかと考えたのは、夢を見たせいだとしか言えなかった。
昔から繰り返し見る夢に、変化が訪れた。それは、緋月たちと会ってからだ。そのことには、何かしらの意味があるような気がしてならない。

「……あなたは、僕たちの存在を不審に思わないのですか？」
まるで別のことを聞き返されて、桜は思わず苦笑を浮かべた。
「そりゃ、不審だと言うなら、不審かもしれないけど」
「では、何故」
「それがわかっていたら、あなたを部屋に招き入れたりしないでしょ。でも、あなた、どこか寂しそうに見えたから」
「どうして……っ」
桜の言葉に小さな声で呻くようにつぶやき、彼は唇を噛み締める。
「何もかもが違うのに、どうして、言う言葉は同じなんです……！？」
「……何の話？」
責めているかのような、悲痛な声音。桜が戸惑ったのに気づいたのか、決まり悪げに口をつぐむ。
「いえ、何でも」
「何でもないって感じじゃないでしょ。あなた」
「あなたには関係ありません！」
それは、拒絶だった。
緋月たちにしても、こちらの出方を探っている様子がある。そのぎこちなさを不思議に思わないわけではない。それでも、彼女たちは戸惑いながらも距離を測ろうとしているようにも思えた。だが、目の前のこの男にそういう雰囲気を窺うことはできなかった。
「僕は、認めません。たとえ、そうなのだとしても、あなたは違う！」
「違う、って、何が」
そんなことを言われても、わからないものはわからない。
その答えが気に入らなかったのだろう。桜を見据える眼差しが苛烈さを増し、ぶわりと風が巻き起こる。それまで穏やかに見えていた窓の外に、ほとんど風などない。不意に巻き起こった風に煽られ、カーテンが勢いよく翻った。
それが、目の前の男が起こしたものであることを、疑う余地はな

い。緋月の言っていたことを、唐突に思い出したからだ。この男の属性は――――風。気性が荒いのは火の属性である緋月が一番なのかもしれないが、暴走した時の歯止めが効かないのは風の属性を持つこの男だと地の属性を持つ少年があっさりと告げた。だからこそ、一番厄介なのだ、と。

「もう、二度と目覚めたくなんてなかったのに……！」

泣き出しそうな声で、叫ぶ。それは、聞く者に痛みさえもたらしかねない響きを持って、突き刺さる。

「僕は人が嫌いです。人の世なんて滅びてしまえばいいと思っています」

「でも、あなただって人と契約をしたから、今があるんじゃないの？　緋月たちがそうだって言っていたように」

「たとえ、そうだとしても！　それを奪ったのは、人です！」

開け放たれたままだった窓から、背後に飛び退るようにして男は屋外へと移動する。何もない宙に支えもなく立ち、彼は桜を見下ろした。音もなく吹き上げる風が髪を煽り、距離以上に二人の間を隔てているような気がした。

「ちょ……待って！」

手を、伸ばす。

相手は既に高く飛ぼうとしていて、今更届くはずがないと思うのに、その衝動を止められなかった。

届かない、手。その光景が、つい先ほどまで見ていた夢の光景と重なって、強烈に脳裏に蘇る。

あんな想いは、繰り返したくない。繰り返させない。味わうことも、味わわせることも。絶対に、そんなことだけは。

「待って……っ、イナミ！」

意識するわけでもなく、するりと口をついてその名が零れた。目の前の男の瞳が大きく見開かれ、食い入るように桜の顔を見つめる。

「何故、あなたがその名を？」

その声は震え、彼の動揺を現しているように思えた。おそらく、

それが本当に彼の名であるからなのだろう。
「……今のが、あなたの名前なの？」
確認するように問い返せば、目に見えて男の顔が強張った。
そこで、桜は確信する。その質問が、真実を言い当てているのだと。
「その質問に答える義務はありません」
「……イナミ」
「あなたがその名前で呼ばないで下さい！」
感情の波が高まったのか、叫んだその勢いのままに風の威力が膨れ上がる。
「僕をその名で呼んでいいのは……あの人だけです！」
その叫びは、どこか悲鳴にも似ていた。あの夢の中で、伸ばした手が届かない絶望に縁取られた絶叫と、同じだった。
「あれは……あなた、なの？」
ぐらりと、視界が揺れた。
頭の奥で、自分であって自分ではない存在が何かを言っている気がする。それを聞き取ろうと神経を集中させようとすれば、ひどい眩暈と頭痛に襲われた。
「……何、これ……っ！？」
立っていられない。眩暈と、それと同時に襲って来た鈍い痛みに、こめかみを押さえるようにして膝をつく。
駄目だ、と、どこかで声がする。
けれど、同じだけの強さで、知りたいと渇望する心がある。本能的に従ったのは、後者の方だった。
「大丈夫ですか！？」
音もなく傍らに降り立った影がやわらかな動きで肩を掴み、顔を覗き込む。語りかけられるその声音は先ほどまでの刺々しさを取り払い、案じるような響きを持って耳に滑り込んだ。強く閉じていた目を開けてみれば、色素の薄い茶色の双眸が手の届く場所にある。
「……イナミ」

手を、伸ばす。
今度は、遠ざかることなくその頬に触れる。桜の指先が触れた瞬間、びくりと震えたその反応が、ひどくおかしかった。
彼は、怯えているのだ。何かに。こんな立派な体躯を体現できるほどの力を持ちながら、怯えている。たった一人を失った過去を再び見るのが怖くて、最初から全てを拒んでしまえばいいのだと頑なに信じようとしている。
けれど、それでは、何も変わらない。
届いたはずのこの手が、意味のないものになってしまう。
「逃げないで」
「……僕は、逃げてなど」
「待てないの……？」
言葉が見つけられないのが、言わなければならないことがすぐ近くで引っ掛かっているのが、もどかしい。自分の中には確かに存在するはずなのに、それが形となって表に出て来ない歯がゆさがそこにある。
「私は、ここに、いるのに」
どうしてそんなことを言ってしまったのか、その言葉に何の意味があったのか、朦朧としかけていた意識では冷静な判断力などないに等しかった。それでも、そう言わなければならないと、告げなければどこにも進めないのだと、思考とは別の場所で感じていた。
目の前の秀麗な顔が、痛みで生理的に滲んだ涙で歪む。
「あなたは……あなた、なのですか……？」
問いかけられた声は、動揺を隠しきれずに震えていた。目尻から零れ落ちた涙が頬を伝い、首筋を滑り降りて衣の端に吸い込まれる。
その問いに対する答えなど、持っていない。ただ、自分でも知らない奥底から溢れる思いを言葉にした、それだけだった。
「行かないで……っ。あなたに置いて行かれるのは、もう、嫌です」
かすれた声で、懇願するように囁かれる。
強い力で、不意に抱きしめられた。そのぬくもりがやけに心地よ

くて、懐かしいような気がして、大きく息をつく。
これでいいのだと、誰かがどこかで教えてくれたような気がした。
そして、桜はゆっくりと意識を手放した。

6

——あなたは、魔を射るのね。

そうですよ。人の言う、形のある矢を射るわけではありませんが。

——その矢は、月まで届く？

どうでしょうね。そんなことを考えたことはありませんので、試したことはないですけど、あなたが見てみたいとおっしゃるのであれば、やってみましょうか？　月読の神に怒られるかもしれませんが、それもまた一興。

——神を怒らせて、面白いと思うの？　では、質問を変えようかな。私は海を見たことがないけど、波を砕くことはできる？

それも……どうでしょう。僕も、海を見たことがないのですよ。ご存知のように、水守の乙女は湖を守護する存在ですし、火の姫はああですし、蒼樹もああいう方ですしね。今まで縁はありませんでしたよ。ああ、でも、あなたがお望みなら、空を駆けてお連れしてもかまいませんよ？

——それは、楽しそうね。でも、難しいかな。私は神から嫌われているから、海神さまを怒らせてしまうかもしれない。

嫌う……？　あなたを？　何故、神はあなたを嫌うのですか。あなたは、こんなにも綺麗なのに。

——それは、ちょっと褒めすぎじゃないかな。

僕にとって、あなたはとても綺麗な人です。それは、間違っていますか？　おや、何故、そこで顔を赤くなさるんですか。

――うるさいわよ。

神に嫌われている、とは、どういうことですか？

――私の父と母は、人の世では決して許されぬ過ちを犯した。私は、生まれてはならない存在だから。

何故です？　生まれてはならぬ命など、どこにもありません。どんな命も、祝福を受けるべきです。

――たとえそうだとしても、私は、そうではないから。人の世の理は、それを許さない。巫女は、神以外の存在と通じてはならないのだから。

でも、愛し合っていらしたのでしょう？

――そうね。だから、私がここにいる。

それを許せぬと神が言うのなら、神というのは随分と狭量な存在ですね。過程はどうあれ、生まれ出る命の価値は全て同じだというのに。人も、精霊も、等しくあるべきでしょう。

――あなた、そんなことを言って、神が怖くないの？

あなたを失うことに比べたら、神など怖くありません。

――イナミ

え？

――波を射る、と書いて、イナミ。私のために神に向かって矢を射掛けてもかまわないと言うのなら、私は、あなたにその名を与えると約束するわ。

あなたのためになら、神を敵に回しても怖くはありませんよ。実のところ、僕は火の姫君の癇癪の方が怖いですし。……ああ、これは内緒ですよ。

――緋月はそんなに怖くないわよ。あの子、可愛いじゃない。

そんなことを言うのは、あなたくらいです。彼女を怒鳴りつけるなんて。火の姫君も、あなたに怒られるのは嬉しそうですけれど。……本当に、あなたという人は、稀有な人です。

――イナミ

はい。

――あなたの力の全てを、私に捧げて欲しいの。神域に仕える巫女の血を引きながら、名も無き半端な存在であるこの私に、全てを懸けてくれる？　私のことを守って、愛してくれる？

あなたの、望むままに。あなたが射よと命じるのなら、月を射ることも、波を砕くことも躊躇いはしません。神にさえこの矢を向けましょう。この手で神すら殺めてみせましょう。あなたのためにならば、僕は、何を失っても悔いはないのですから。

それは、誓約。
名も無き唯一の人に捧げる、絶対の誓いだった。

「……風が、動いた」
薄暗がりの中で、蒼樹がぽつりとつぶやいた。
「受け入れたのかしら？」
緋月は小首を傾げ、思案げに眉根を寄せる。我が強く、我儘を言うことの多い彼女ではあったが、仲間を想う気持ちは誰よりも強い。自ら望むことなく目覚めてからの間、頑なに全てを拒み続ける存在に頭を悩ませていたのは、誰であろう彼女だ。
緋月とて、複雑な想いを抱えていないわけではない。それは、緋月だけではなく、水と地を司る他の二人にしても同じことだ。
捧げた誓約は、彼の人の命と共に全て失われた。そして、再びその力を振るうことを拒み、彼女たちは永劫の眠りにつくことを選んだ。
……そう、目覚めるはずがなかったのだ。
彼女たちは、それを望まなかった。彼の人のいない人の世になど、何の未練もない。だから、自らの力を封印し、永遠の眠りについた。
目覚めた時は、驚愕した。二度と目覚めないように制約をかけて眠りについたはずなのに、何故か、妨げられた眠り。その要因が何であるのかを知るよりも前に、彼の人のいない世界で再び生きて行かなければならないことに嘆いた。
けれど、かすかに感じ取った懐かしい魂の気配。
それは今にも消えてしまいそうなほどに儚い存在感でしかなく、

辿るのは困難なものだった。それでも、諦めたくなかった。ほんのわずかな可能性であっても、彼の人の縁を辿ることができるのならば、そんな困難など苦ではなかった。

そうして、やっと見つけた。

同じ魂を持つ、たった一人の人を。その身に記憶はなくとも、宿す魂の色は同じ、稀有な存在を。

「どうして、あんなに頑ななのかしら」

「……彼は、あの人に恋をしていたから」

当たり前のように告げられた内容に、緋月は困惑して眉をひそめた。

「そんなの、自分だけだとでも思っているのかしら？」

彼の人を慕う精霊はいくらでもいて、それが自分たちばかりではないことは知っている。その想いが人の言う恋や愛と同じものなのかどうかは知らない。ただ、決して失いたくないかけがえのない存在であると認識していたことは確かだ。

それを、彼も知らないはずがないだろうに。

「彼の真意はわからない。……でも」

「安穏と構えていられないということも、事実ね」

「目覚めたことには意味がある。私たちは、あの人を守らねばならない。今度こそ、失わないために」

妨げられた眠りの理由。それは、おそらく。

「人の世の理など、私たちにはどうでもいいこと。あの至上の魂に害を為すのならば、それを排除するまで」

「そうね」

かつて、彼の人の命を奪った人の世の謀りごと。

同じことを、決して繰り返したりはしない。そうでなくては、こうして再び目覚めた意味はないのだから。

「静流からは、何も？」

「今のところは、何も。おそらく、向こうも出方を図りかねているはず」

「かつて存在を消しておきながら、それでも足りないと言うのかしら」
「人の考えなど、私たちにはわからない」
人と精霊は相容れることはない。それでも、互いを尊重することはできる。歩み寄ることはできる。それゆえに、あの人との穏やかな関係があったのだから。
「今度こそ、守る」
そうでなくては、ここに再び集った意味はない。
それが、ただひとつの願い。

7

桜が再び目を覚ました時には、あの男の姿はなかった。元の通りにベッドに寝かされてはいたがカーテンも窓の鍵も開いたままで、あれが夢ではなかったことを教える。

意識を手放した桜をベッドに運びはしたが、目を覚ますまでここにいることまではしなかったらしい。中途半端な気遣いが相手の微妙な戸惑いを感じさせるようで、何となく笑いそうになった。

もちろん、桜の方にも戸惑いはある。

もし、目が覚めるまで彼に付き添われていたとしたら、目が覚めた時に居た堪れなくなってしまったに違いない。そう思えば、放っておかれたも同然の今の状況の方がいくらかマシかもしれない。

何だか、気恥ずかしい言葉を口走ってしまったような気が、する。

あの男との間にあったことを、まるで覚えていないわけではなかった。ただ、自分の中にある自分の知らない何かに突き動かされるような感覚があったのも本当のことで、どこまでが現実のできごとだったのかが曖昧なのだ。

すっきりとしない頭を抱えてはいたが、意識を失う前に感じた頭痛や眩暈は綺麗に治まっていた。

あれは、一体何だったのだろう。

自分の身に起きていることだというのに、自分でも理解できない。ここ数日、おかしなことばかりだ。

考え込んでいても始まらないし、学校が休みになるわけでもない。おかしなことが続けて起きていても、日常はそうそう変わらない。教室に入れば普通に緋月がいて、そこにいるのが当たり前のように日常風景に溶け込んでいた。どうやら、昨日、資料室で会った二人も、緋月と同じようにこの学校の生徒に成りすましているらしい。

そこまで聞いて、あの男のことが気になった。彼は、どうしているのだろう。緋月に聞いてみると、学校には誘ったけど来ていない

と思う、という答えが返ってきた。
「気になるの？」
「……まあ、ね。今朝も来たし」
「ふうん」
イナミ、と呼んだ気がする。その名前は無意識に出て来たものだったが、その時に見せた動揺ぶりから察するに、それが彼の名前で間違いないのだろう。
では、何故、その名前が出て来たのか。それは、無意識としか言いようがない。自分でも知らない場所にある何かが、衝動的に湧き上がったのだ。
緋月は、相変わらずつまらなそうに窓の外を眺めている。そんなにつまらないのなら、どうして高校生ごっこをしているのか不思議でならないのだが、彼女には彼女なりの理由があるようだ。不可解に過ぎる。
それ以上は何も言うつもりがないのか、緋月は黙り込んだままだ。昨日もそうだったから、気にしないことにする。授業に興味があるようでもないし、そして、教師もそれに関心を抱いていない。どういうからくりなのかは知らないが、そういうことになっているらしい。
だが、その日は少し違っていた。
それまでつまらなそうに窓の外だけを見ていた緋月が、教師の話に耳を傾けたのだ。桜にしてみれば、そっちの話の方が窓の外の景色よりよほどつまらないような気がする話題だ。教科書の話題から少しばかり横道にそれ、史実にまつわる逸話を話していた。
クラスのほとんどの生徒が、テストにも出ないだろうその話を聞いていたとは思えなかった。桜にしても、右から左に聞き流していたと言ってもいい。寝ていなかっただけ上出来、と言うべきかもしれない。
だから、いきなり椅子を蹴倒すような勢いで立ち上がった緋月に、驚いた。おそらく、それは他の生徒も同じだったのだろう。教室中

の視線が緋月に集まり、怪訝そうな様子で彼女の動向を見つめている。
「……緋月？」
桜が振り向くと、緋月は泣きそうな顔で肩を震わせていた。
「何も、知らないくせに」
そう言って、緋月は泣くのを堪えるように唇を強く噛み締める。そんなに噛んだら傷がつくのでは、と明後日の方向に心配してしまうくらいに。
「その目で見て来たわけでもないのに、知ったようなことばかり……！」
何を言っているのか、誰にもわからなかったに違いない。それは、今までの教師の話に対して発せられた言葉だとは、到底思えなかったからだ。
けれど、何となくわかってしまった。それは、直感だったと言ってもいい。
緋月は、知っているのだ。教科書にはたった数行しか記されない、たいして重要な意味も持たない小さなことであったとしても、緋月たちにとっては直に関わったことなのだ。
「謀反なんて、ありえない。だって、あれは」
緋月がそう言った時、それまで固まっていた教師が口を開いた。
「確かに、謀殺であったという説が、最近の研究では大きくなっているよ。教科書には載らないが」
「……謀殺？」
「まあ、表立って暗殺されたわけではないけどね。つまり、時の権力者にとって都合の悪い存在だったから消された、ということになる」
「人は、そういうことが好きなのね」
緋月は、悲しそうにそうつぶやいた。
それは、ただの女子高生が言うには不自然な言葉だったが、教師は少しばかり妙な表情を浮かべただけで終わった。緋月の存在や言

動に対して、さほど疑問を抱かないようになっているのかもしれない、と桜は思う。そうでなければ、説明のつかないことが多いからだ。

こうして、緋月が教室にいることも、授業をまるで聞いていないのに、何事もないかのようにスルーされていることも。

「歴史はそういうことの繰り返しだ。……さて」

やはり、緋月のことなど何もなかったように、教師は話を再開した。それにつられ、教室の雰囲気も、それに倣うように元に戻って行く。

桜も釈然としない想いを抱きはしたものの、何となく、緋月には声をかけられないままだった。だらだらと続けられる教師の話は更に教科書から脱線し、それに伴って、緋月の苛立たしげな様子は増した。

再び緋月が立ち上がったのは、あまりにも脱線した教師の話に、教室内が微妙に白けた雰囲気になりかけた頃だった。

「聞いていられないわ」

緋月はそう言い捨てると、そのまま教室を出て行ってしまった。だが、やはり、教師は何も言わない。生徒たちも、何事もなかったようにだらけた雰囲気のままだ。

緋月が出て行ったことを気にしているのは、どうやら桜だけらしい。

溜め息をついて、窓の外に視線を向ける。

教室を出て行った緋月が、一人でどこに行ったのかが気になった。あの埃っぽい資料室にいるのだろうか。それとも、どこか別の場所で時間を持て余すのだろうか。

そして、緋月が今の教師の話の何が気に入らなかったのか、不思議だった。

教師の話が脱線するきっかけとなったのは、教科書に載っていた記述だ。教科書全体の量からすれば、ほんのわずかな内容にしか過ぎない歴史的事実。ついでに言うなら、この時代のことは受験にだ

ってたいして関係ない。教師が脱線したのは、その辺りに造詣が深いのかもしれない。
正直、緋月の態度がなければ、桜は全く気にも留めなかったはずだ。
不意に、ずきりと頭が痛んだ。
それは、今朝、イナミと会った時に感じた痛みと同じものだった。強烈な眩暈と共に訪れる、理不尽な痛み。
どうして、と思う。
こんなことは、おかしい。自分のことなのに、どこか遠い何かがあるような気がしてならない。
けれど、それは、不快なものとは少し違った。
ただ、何となく、焦りのような感情が自分の中に芽生えている。
そんな感覚だった。

結局、緋月はそのまま教室に戻っては来なかった。
放課後になり、桜は少し考えた末に、昨日と同じ資料室に行くことにした。用事があるわけではなかったが、気になったからだ。緋月がいるかもしれないし、いなくても、あの二人のうちのどちらかはいるような気がしたからだ。
聞いてみたいと思った。
緋月を始めとして、彼女たちは何を知り、何を求めているのか。
聞いて答えてくれるのか、その答えを理解できるのか、それはわからない。昨日の話にしても、肝心なことははぐらかされたままだ。このままでは危ないというのは、一体、どういう意味なのか、桜が当事者らしいのにまるでわからないのは納得が行かない。
それに、イナミのこともある。
そう思った桜が資料室を訪ねると、そこにいたのは童顔の愛くる

しい少女だけだった。あの三人の中では、一番話を聞きやすそうでホッとする。
「こんにちは」
少女は立ち上がり、にこりと笑った。
「はい、えーと」
「静流です。もしよければ、そう呼んで下さいね。お茶を煎れますから、ゆっくり座っていて下さい」
そうは言われたものの、何となく落ち着かない。
「あの」
「はい、何ですか？」
手慣れた様子でお茶を用意する静流に声をかけると、彼女はふわりと髪を揺らして振り返り、次の言葉を待つように小首を傾げた。
「聞きたいことがあるんですが」
「……はい、何でしょうか。私に答えられることなら、お答えします」
「答えられないことは、答えないんですか？」
「私が知らないこともありますから。あなたのことは、私よりも詳しい人がいるから」
「それって」
「あなたの所に来たはず。風の、イナミ」
「やっぱり、あの人の名前はイナミというんですか！？」
「……それは、私の口から正解だと答えることはできません。でも、あなたがそうだと思ったのなら、それが答えです」
静流のそれは、答えているようで答えていない。桜にしてみれば、余計に疑問が大きくなっただけだ。
「あの人って、誰ですか」
「それは……」
静流は困ったように微笑んで、桜の前にそっと湯飲みを置いた。
「私たちの、一番大切な人です。もう、ずっと前に、失われてしまったけれど」

「ずっと前……です、か？」
「ええ」
と、静流は少しだけ寂しそうな表情を浮かべ、どこか遠くを見るように視線を移す。
「桜さんたちの言葉で言うのなら、歴史の中に埋もれてしまったどこかです」
「……その人は、私に似ているんですか？」
「似てはいないと思います。似ているとか似ていないとか、それは、魂の色とかそういうものだから」
魂の色と来た。理解しがたい言葉である。と言うか、あまり理解したくない。
これが、自分の身に起きかけている、いや、既に巻き込まれている現実でなければ、そのまま終わりそうな話だ。
だが、否定しては意味がないことを、自分の中の何かが告げている。そんな気がした。
「私は、それをどうすればいいんですか」
「……ただ、受け入れて下さい。あるがままに」
「受け入れてって……」
無理がある。そう簡単に、非常識なことを受け入れられるはずもない。それでも、静流の言葉がとても切実なものに思えて、それを否定することはできない。
「わかっています。難しいだろうな、ってことは。でも、信じて欲しいんです」
それは、どこか悲痛な響きを持つ言葉として、溶け込むように思えた。
緋月が教室から出て行った理由を、彼女は知っているのだろうか。それは、彼女たちが『あの人』と呼ぶ誰かに関係しているのだろうか。
聞きたいことはあるのに、何故か、言葉にならなかった。そのことがもどかしくて、焦りが生まれる。

「……今日、緋月が授業中に教室を出て行ったんです。私には、何が気に入らなかったのかわからなくて」
しばらく湯飲みを弄んで、悩んで、ようやく出て来たのはそれだった。
もしかしたら、聞かなければならないことはもっと違うことなのかもしれない。たとえば、イナミのことにしても、知りたいことは他にもある。
それでも、今、一番気になっているのはそのことでしかなかった。昨日も今日も緋月がつまらなそうにしているのは同じだったのに、あんなふうに態度を変えることが不思議だったからだ。
静流に簡単な事情を話すと、彼女は納得したようにうなずいた。
「それは、たぶん……」
一瞬迷うような表情を見せたものの、静流はその理由について話してくれた。
彼女たちが『あの人』と呼ぶ誰かと、歴史とのわずかな接点を。その決定的な相違が、緋月を苛立たせたのだろうと。
「歴史が権力者の都合のいい記述に書き換えられるのは、世の常です。そのことを、どうにかしようと思う気持ちは私たちにはありません。私たちは人と関わることを、基本的に禁じられていますから。ただ、あの人の存在すら消し去られている事実は、私たちに悲しみをもたらします。たとえ、それがあの人の望むことであり、人の世の必然であるのだとしても」
「……それは、どういう……？」
「いずれ、わかる時が来るかもしれません。来なくてもいいんです。そんなことは、大切なことではないから」
「そんなことって」
「私たちには、たいしたことではないんです。歴史が私たちの知っているものと違っていようがいまいが、本当の意味ではどうでもいいんです。だって、それは、人の目から見たものでしかないんですから。何よりも大切なのは、あの人がいた証を私たちが持っている

ということ。それだけなんです」

少しだけ悲しそうな眼差しを見せながら、それでも、静流は笑った。

8

静流との話をそこそこで切り上げ、桜は資料室を後にした。緋月が来るかもしれないと思いはしたが、来たところで何を話したらいいのかも思いつかない。

それに、彼女の知らない所で彼女のことを聞いていたというのは、少しばかり気まずい。静流は、彼女は気にしないだろうとは言ってはいたが、何となくそう思ったのだ。

難しい、と思う。

彼女たちが桜に何かを求めているのはわかるのに、それに対してどうしたらいいのかわからない。

「……私に、どうしろって言うんだろう」

何かを求めているわけではない、そうは言うけれど。その言葉の裏に隠された彼女たちの想いは、決してそれだけではないと肌で感じるのだ。

ここ数日の目まぐるしいできごとを思い返しながら、学校からの帰り道を歩いて行く。その途中で、ざわりとした悪寒を感じて振り返った。

「……っ！？」

それは、覚えのあるものだ。緋月に初めて会った日、掃除をしていた時に背後から感じた視線と同じものだった。

「誰……？」

緋月たちとは、まるで違う。彼女たちのそれとは比べ物にならないくらいに剣呑なそれは、敵意と呼んでも差し支えのないものだ。肌にひりつくようなその視線に、何かがけたたましく警鐘を鳴らす。

この感覚を、知っている。この敵意を、どこかで感じたことがある。

それは、記憶だとか何だとか、そういうはっきりとしたものとは違った。けれど、確かに自分の中に存在するものだ。あの日よりも

更に強く感じ取れるそれは、並々ならぬ警戒心を抱くのに充分すぎるものだと言えた。
「私に何か用ですか？」
あくまでも敵意しか向けて来ない相手には、自然、声も刺々しくなろうというものだ。そうして桜が振り返った先にいたのは、同じクラスの西野拓弥だった。
「……にしの、くん？」
どうして、という疑問符がまず浮かぶ。
彼は四月に同じクラスになったばかりで、クラスの中でも割りと人気のある男子生徒だ。小柄だが存在感があり、リーダーを務めるタイプとは違うが、グループを作る時には輪の中心にいるような存在ではあった。
だが、桜との接点はほとんどない。どちらかと言えばクラスでも目立つ生徒である西野に対し、桜は目立つのを避ける傾向があったと言えるからだ。
彼とは、話したこともない。話そうというきっかけもない。ただ、同じクラスにいるから知っている、用事があれば話すというだけの、それだけの関係。そのはずだ。
だが、彼から向けられる視線は、そんなものではないように思えた。それは、はっきりとした敵意だ。単なるクラスメイト、そんな関係だけの相手に向けるには場違いなほどの、冷たく冴えた視線。
警戒してわずかに身体が後退したのは、本能から来るものだった。おかしい、と、何かが告げる。
西野は、クラスメイトだ。そう思っているのに、強烈な違和感が付き纏う。それは、緋月が教室にいたことに対して抱いた違和感よりも、もっと大きなものだった。
「……あなた、誰？」
「あれっ、困ったな。暗示が解けかけているのかい？」
本気で驚いているらしく、大きく目を見開いて桜を凝視している。
「まあ、そんなことはどうでもいいんだけどね。僕は、君を始末す

ることができればそれでいいんだから」
物騒なことを爽やかな笑顔と明るい声で言って、西野は桜へと一歩近づいた。それから逃れるように、桜は再び後ずさる。
傍から見れば、爽やかな美少年に話しかけられているようにも見えるのかもしれない。西野はクラスの中でもそれなりにもてると言われていたような気がする。正直、興味はなかったから聞き流していた。だが、それを聞いたという事実さえ、ひどく曖昧でおぼろげなものに思えて来る。
全てが、まやかしであったかのように。それらは、何もかもが作られたものであったかのように。
このクラスメイトは、本当に、最初から同じクラスにいただろうか？　それは、ただ、そう思い込んでいただけではないのだろうか？
緋月が、ある朝、突然クラスメイトであったように。
始末する、と、西野は言った。
その言葉にそれほどショックを受けなかったのは、既にその可能性を示唆されていただけとは思えなかった。こうなることを、桜は心のどこかで予測していた。蒼樹と名乗った寡黙な存在が告げた言葉より何より、その感覚が桜の中に大きく存在していた。
「どうして、私を始末するの？」
「……決まっている。君が、あの人の系統を受け継ぐ者だからだよ」
ここでも、また『あの人』だ。
それが誰なのかは知らないが、つくづく迷惑な存在だと思わずにはいられない。
そのせいで、桜の今の状況があると言っても間違いではないはずだ。
比較的桜に対して好意的に見える静流と蒼樹はともかく、後の二人の態度はどうかと思う。高飛車で人の話を聞いていない緋月に付き纏われ、イナミと名乗る男には刺々しく当たり散らされ、挙げ句の果てには自称クラスメイトに始末するとまで言われては、恨みたくなるというものだ。

大体、桜は『あの人』とやらがどこの誰で、自分とどういう関係にある人間なのかも知らされていないのだ。理不尽にも程がある。
「全く、誰もがあの人あの人って……！　それがどこの誰だかは知らないけど、今の私に何の関係があるの？」
「そんなことはどうでもいいよ。君という存在が目障り。それが理由」
なけなしの抵抗とも言える桜の言葉は、あっさりと切って捨てられた。
それは、場違いなまでに明るく楽しそうな声でしかない。だからこそ、言葉と声音との相違に背筋の寒くなるような感覚を覚えずにはいられなかった。
「そんな程度の理由で、始末されるとか言われて納得できるわけないじゃない！」
「……あれぇ、困ったなぁ。こんなことに、余計な手間はかけたくないんだけど」
何とも勝手な言い草だ。こちらの事情など、まるで意に介した様子がない。
そもそも、始末するなどと言っている時点で、そんな気遣いなどあるはずもないだろうけれど。
「手間とか何だとか、こっちを人間扱いしていないような言い草ね」
「そう扱ってもらえるとでも思っているのかい？　半端者の分際で！」
ざわりと、周囲の空気が揺れた。
景色が歪み、確かに聞こえていたはずの夕方の喧騒が遠ざかる。そこに含まれる容赦のない敵意とそれに導かれる殺意は、今までそんなものとは無縁に過ごして来た桜であってもはっきりと認識できるものだった。
「恨むのなら、あの人の色を受け継いだ自分を恨むんだね！」
あの人あの人と、本当に傍迷惑に過ぎる。
顔も見たことがないし、その存在すら不確かな相手ではあるが、

そう言われたら恨みたくもなるというものだ。

―そう言わないで。私が、好きでそうなったわけじゃないし。

不意に、頭の中で声が響く。

それはどこかで聞いたことがあるような、懐かしいような気さえするものだ。けれど、その声の主に心当たりなどまるでなかった。

誰が、と疑問に思う気持ちは当然あった。それでも、その声が自分の中から響くものであることに気づいて、わずかに薄ら寒い予感を覚える。

魂の色、あの人の系統を受け継ぐ者、望むことなくそんな言葉で呼び表わされた戸惑いに、真っ向から突きつけられた現実だったからだ。

そんなものは知らない。そう言いきることは簡単だ。だが、自分の中にある感覚は消えない。認めてしまえと、何かが働きかける。

（何よ……っ！）

苛々する。

わけのわからないことに巻き込まれているのは、理解できている。それが、どうやら桜自身に起因するものであるらしいことも、何となくわかる。

だが、それを許容できるかどうかは、また別問題だった。

―全てを許容して、とは言わない。でも、認めることは必要なのよ。

認めるって、何を。

頭の中に直接呼びかけられる声に、目まぐるしく思考を巡らせる。

―あなたは、私。私は、あなた。そして、あなたと私は同じではないわ。

思考が、紅く染まる。
それはひどく鮮明で、それでいて、不透明な何かをそこに見せる。
自分には何かができるはずなのだと、根拠もない想いが沸き上がる。

―感じて、信じて。

何を？

―彼ら、を。

投げかけられる言葉は抽象的で、何ひとつ解決になっていない。
そのためにはどうすればいいのか、具体的な方法など示されていないのだ。
「どうして、私が……！」
理不尽だ。
なのに、頭の奥から聞こえて来るようなその声に逆らえないような気がするのは、何故だろう。そして、身体の内からこみ上げてくる衝動は、嘘ではない。
その瞬間、目の前に小柄な影が音もなく降り立った。わずかに宙に浮いた状態で桜を庇うように位置したその姿は、馴染みのある同じ高校の制服だ。
蒼樹と名乗り、属性は地にあるのだと告げた精霊の少年。華奢で小柄な彼が桜を庇うように立つその姿は、傍から見れば不自然な光景だった。
「下がって。私が、あなたを守ります」
彼に守られることに戸惑う桜に、蒼樹は告げる。その言葉は無駄を省いたもので、そこには逆らう気持ちを押さえつける何かが存在していた。
「そいつを庇うのかい？」

西野が目を眇め、挑むように問う。
「それが私の役目だから」
蒼樹の答えは、端的に過ぎる。西野はそれを聞いてわずかに顔を歪め、嘲るような笑いを漏らした。
「地の賢者ともあろう存在が、たかが人間風情に命を賭して付き従うと言うんだ？　お笑いだね」
「……その点ではお前も同じこと」
「違うね」
蒼樹の指摘を一言で否定し、西野は眼差しを険しくさせた。蒼樹はそれに怯むことなく、淡々と先を続けた。
「違わない。人を見下すお前は、そうであるがゆえに、使われていることの愚かさを気づかない」
「この僕が、人ごときに使われていると言うのかい？」
「そうだ」
抑揚なくそれを肯定して、蒼樹は大地を踏みしめるように立った。
「だから、お前は弱い。拠り所を持たない力は、脆弱」
「僕がお前に劣るとでも？」
「そういう問題ではない」
「人ごときに使われる精霊が……！」
「違う。我々は、使われているのではない。信頼の許に、繋がっている。人の与える愛の重みも、価値も知らないお前は、永遠に私に勝てない」
空気が、揺れる。勢いよく渦を巻くように吹き上がった風が、彼らの髪を乱す。
ざり、と靴底が地面を踏みしめた。その音がやけに大きく聞こえて、それと同時に奇妙な感覚を連れて来る。
それは、おそらく、既視感と呼ばれるものだ。
こうして守るために立つ彼を、その存在を、桜は知っている。理解している。それは、理屈ではなく感じ取れる事実だった。
「呼びなさい」

「は？」
「あなたの魂が、それを知っている。私は、それに従う」
眉ひとつ動かさずにそう言われても、桜は困惑するばかりだ。
確かに、知っている気はする。けれど、それだけだ。その先に進むための手がかりなど、どこにもありはしない。
「私は、蒼樹。あなたが地に有り希うことを名に刻んだ、地の賢者。あなたが私に授けた言霊を、あなたは知っているはず」
だから。
緩やかに、唇が言葉を刻む。それは意味のある音になることはなく、その動きだけが目に焼きつく。
「あ……っ」
何かが、頭の中ではじけたような気がした。

―そう、深呼吸して、自然と息を合わせて。

再び、自分の奥から声がする。懐かしむように、穏やかに流れるその声に、感覚を重ねて委ねて行く。
「我は、地に有りて希う」
まるで意識することもなく、無意識から零れるように唇が言葉を紡いだ。桜自身、まるで身に覚えのない言葉だ。そのことに驚くよりも先に、蒼樹がそれを聞いてほんのわずかに笑みを浮かべた。
あまり表情を見せないと思っていた彼の、小さな揺らぎ。それは、その場にいる者の動きを止め、彼の先んじた動きを助ける結果となった。
「……承知した」
すっ、と上げられた蒼樹の腕が横薙ぎに払われる。ぐらりと地が揺らぎ、それと同時に蒼樹は軽く地を蹴って跳躍した。同時に、目の前の西野の身体が宙へ飛び出し、空中で両者が激突するようにぶつかった。
それは、人間では不可能な跳躍力であり、彼らが人とは違うこと

を明らかに示していた。見た目は変わることがなくても、彼はら確かに人とは違うのだと見せ付けられる。だが、畏怖や嫌悪というものは存在しない。
そこにあるのは、ただ、純粋な驚きだけだった。
―全てに意味があるの。名の理は、言霊の封印。それを、今、解放します。

再び、声がする。
頭の中で直接話しかけられているのに、ちっとも不快には感じなかった。何となく、それが当たり前であるような、そうあっても不自然ではないような気がして来たからだった。
そもそも、最初から不快に思っていたわけではない。戸惑っていただけに過ぎない。受け入れてしまえば、それはしっくりと馴染む空気を纏ってそこに存在する。
不快なのは、一方的にその理屈を押し付ける相手の方だ。
桜は自らの中から無意識に流れ込んでくる衝動に任せ、口を開いた。
何かを考えてのことではない。全ては衝動だ。自分の中から湧き上がる何かに任せた、それはある意味で行き当たりばったりの行動にしか過ぎなかった。
けれど、それが、その場の全ての流れを変えた。
「我は、地に有りて希う」
その言葉が零れ落ちた瞬間、世界の時が刻むのをやめた。音が消え、静寂がその場を支配する。
「水守の乙女に我の盾となることを求め、風の将軍に我が剣となることを望む。火の姫君にその刃の守りを祈り、即ち、地火風水の四精霊に我が言霊に従うことを命じる。貴き教えの名の下に、その力を放ち、我が前に示せ！」
言葉の終わりと同時に、どん、と、空気が振動した。

その瞬間、何もないはずの空中から三つの影が顕現する。そのうちのふたつは、見慣れた学校の女子の制服だ。そして、もうひとつは神職めいた袴姿。こちらも、ここ数日で見慣れてしまったと言うべきか。

「呼ぶのが遅いのよ、馬鹿！」

高らかに文句を叫ぶのは、緋月で。

「ひえええ、そ、そんな、無茶言ったら駄目なのでうううう！！」

それに、わたわたとフォローを入れる静流。

「……チッ」

最後のは明らかに桜のことを睨んでの舌打ちで、それはそれで理不尽だ。友好的ではないのは、変わらないらしい。

「呼ばれたからには仕方がない、従いますよ」

約一名、あからさまに嫌そうなのは気にはなるが、彼らが桜の言葉に応じて姿を現したのは明らかだった。その言葉が桜自身の意識したものではなくとも、桜が導き出したものであるものに間違いはない。

それは、先ほどから頭の奥で語りかけて来る『誰か』がもたらした、偶然の奇跡のようなものだ。それでも、その言葉が間違ってはいないことだけはわかる。ここに参じた四人の精霊の姿があること、それが答えだった。

「覚醒はしないはずじゃなかったのか……？」

臆したかのように、西野がつぶやく。

さすがに、四対一では分が悪いと踏んだのだろう。美少女めいた顔立ちが、焦りでわずかに青ざめる。宙に浮かんだままそれを見下ろし、蒼樹はわずかに息をついた。

「覚醒はしない。それは、彼女の意思。私たちは、その意思に従うまで」

「え……っ？」

蒼樹の言葉にやけに驚いたのは言われた西野ではなく、桜の前に

降り立とうとした男の方だった。
彼は宙に浮かぶ蒼樹を振り仰ぎ、急いた口調で尋ねた。
「それは、どういう意味ですか、地の賢者殿」
心なしか口調が刺々しいものに変わり、表情が強張っている。どうやら、それは彼にとって知らないことだったらしい。秀麗な顔に苛立ちを滲ませ、蒼樹を見据える。
宙に浮かんだままの蒼樹は涼しげな顔でその視線を受け流すと、素知らぬ様子で横を向いて押し黙った。
「……ええと、風将さまは知らなかった……ですか？」
おどおどとした様子で静流が声をかけ、風将と呼ばれたことで彼は我に返ったようだ。ちらりと桜の方を振り返り、宙の蒼樹とを交互に見てから、深く溜め息をつく。
「そのことについては、後で賢者殿に説明していただきましょう。……まずは、この場の始末が先でしょうから、さっさと済ませた方がよさそうです」
あっさりと言い放つが、その内容は辛辣だ。見目の整った容貌でさらりと言われると、ぞくりとした怖さを滲ませる。
ばさりと衣の裾を翻し、宙に何かを求めるように掲げたイナミの手の中に、彼の背の丈に近い長弓が音もなく現れる。
彼は、それを流れるような所作で構えた。その所作には迷いも乱れもなく、彼の際立った容貌と相俟って、息を呑むような光景に見える。そして、彼が構えたそこに在るのは弓だけだ。本来であれば、番えるべき矢が見当たらない。
一瞬、不審に思う。
けれど、すぐに夢で見た問答を思い出した。
彼の射る矢は、人の言葉で表される矢ではない。彼の力を具現化した、魔を破るための力の塊だ。それは実体を持たず、彼の力だけを糧に放たれる。そして。
「風将さま！」
静流が、彼の動きを見て慌てたように飛びのいた。

そのままそこにいては、彼の射線を邪魔するからだ。矢を番えて引き絞る彼の滑らかな動きを見て取った蒼樹が、更に上空から状況を睥睨する緋月へと視線を向けた。
「火の姫」
「……わかっているわ、大丈夫」
上空に浮かんだ緋月が、最低限の言葉で伝えられた何かに力強くうなずいた。
イナミの形のよい指が、弓を引く。何も番えることなく、ただ、相手を見据えてその指先が力を放つ。
「風将！」
「はい！」
その瞬間、緋月が叫び、緋月が彼を呼ぶ声と、応じる彼の声が重なる。
「名も無き刃に捧げた言霊の誓約において、我が力の解放を願わん。貴き教えの名の下に、我ら四精霊の力を解き放て！」
緋月の振り下ろした手から放たれた鮮やかな緋色が、風と共に空を切る。
空気を震わせる音と共に西野の足元に突き立った形の無い矢は、緋月の手から放たれた緋を纏って紅く揺らめく。その様はまるで火矢のような様相を見せ、そこから立ち昇る揺らぎが生き物のように西野の身体を這い登り、絡みつき、彼の身体をその場に縫い止める。
「う……動けない……っ！？」
西野はぎょっとしたように足を引こうとしたが、既に鎖のように絡みつき、動きを奪うその緋色からは逃れられない。見た目は陽炎か何かのように頼りない風情だというのに、その拘束力はそれを裏切っている。
火の姫の力によって、風将の矢は強大な力を得る。それは、火の姫の助力に限ったことではなく、他の精霊でも同じことだ。だが、彼らの中の主格である火の姫、緋月の力を糧にした時の威力は半端ではない。風将一人でも敵を屠ることは可能だが、その威力は彼単

独の力とは比較にならなかった。
「そう。お前は動けない」
体重を全く感じさせない動きで、蒼樹が再び西野の前に降り立った。
「人を見下すお前と私たちの、それが差というもの。言霊に縛られても、私たちは信頼という絆を得て更なる力を約束されている。そして、風将と火の姫の力が併せ持つ威力は、誰にも太刀打ちはできない」
淡々と告げられる言葉に、西野が唇を噛み締める。
「殺しはしない。人や相手を殺めるために我らの力を使ってはならないというのが、彼女の意思。私たちは、未来永劫逸れに従う。そして、人も精霊も、同じ存在。そこに差異はない。ただ、時の流れ方が違うだけ」
淡々と告げられる蒼樹の言葉に、まるで死刑宣告か何かを聞いたかのように、西野が絶望を表情に乗せて小さく呻いた。そして、悔しげに歪んだ唇が言葉を吐き出す。
「人ごときに使役される存在が……！！」
「それでも、お前よりも私たちの方が強いのは事実。認めるべきだ」
精霊と人とを比べたのなら、人を超える力を持つ精霊の方が圧倒的な力量を誇るのだろう。けれど、その力を笠に着て人を見下せば、力はそこで立ち止まる。人と絆を結び、言霊に縛られ、そうして不自由を強いられているように見える存在の方が力の差を見せ付けるのは、それゆえだ。
そのことを理解していなければ、どれだけ強大な力を持っていたとしても意味はない。人を見下して理解を深めようとしなければ、互いに不利益を被るだけだ。人と精霊は別の存在であり相容れることはないが、手を取り合うために近づくことはできる。そうして言霊の契約を交わし、その人とのために力を振るうことを喜びとする。
全ての精霊がそうするとは限らない。けれど、そう在れたら幸福だと思ったのは、あの人と出会ったからだ。それは蒼樹だけではな

く、あの人に誓約を捧げたからには彼らも同じことを思っているはずだ。
直接言葉にすることはなくても、きっと、それが、真実。
感情の宿らない瞳ではあったが、彼はわずかに笑みを浮かべたように見えた。
「消えろ」
ぽつりとつぶやかれた言葉に応じるように、緋を纏った矢がぶわりと膨れ上がる。それが西野の全身を包み込むかのように大きく育ち、はじけるように消えた。その後には、何の存在も残ってはいない。
「こ、殺したの？」
精霊の死と人の死の定義の違いはわからないが、目の前から消えたということに間違いは無い。桜が怖々とそう聞けば、蒼樹はあっさりと首を横に振った。
「殺してはいない。存在できないように力を削いだだけ」
「存在を消したってこと？」
「……違う」
蒼樹は首を横に振ったが、桜には今ひとつ飲み込めない。目の前であっさりと消えてしまった存在に狼狽しきっていて、そんな端的な言葉ひとつで納得できるようなものではなかったのだ。
「存在できないように、っていうのは、私たちは力を持つことによって実体を保っているので、ええと、力を奪われたら実体化が保てなくて、消えちゃうのです。でも、それは、死ぬというのとは違うので……！」
慌てたように、静流が言葉を重ねた。それを受けて、ようやく蒼樹は口を開く。
「彼はここから消えただけであって、死んだという定義とは違う。そのうち、力が戻れば復活する。その時に我々と敵対するかどうかは、今の時点ではわからない」
「……そうか、あれ、でも」

桜はふと気づいて、首を傾げた。
「西野は同じクラスにいたことになっているのよね？　それはどうなるの？」
「彼の存在がここから消えたことによって、それに類する暗示は全て無効になっているはず。暗示そのものの存在を知ってしまった、あなたを除いては」
つまり、これで全ては元通りに戻るということなのだろう。何事もなく、平穏であった日常に。
（日常？　本当に戻るの？　知ってしまったのに？）
暗示の存在を知ってしまったことでその事実は残ってしまうように、目の前に存在する精霊である彼女たちの存在は現実だ。そして、彼女たちと桜との、今あるものとは違う部分でのつながりも。
知らない、と思うのは、意識的な場所でだ。
けれど、無意識下で何かを知っていると感じてしまうのも、本当のことだった。
「……帰る」
何かを言いたそうな視線から逃れるように、桜は踵を返した。
わけがわからない。どうしたらいいのか、自分では見当もつかない。
急に壊された日常は、受け入れるのも拒むのも容易ではない。どうすればいいのか、自分でもわからないまま迷っている。そんな感じだった。
家に帰り、いつものように家族と夕飯を食べ、お風呂もそこそこにベッドに入る。あまりにも目まぐるしい一日を過ごしたせいか、布団に入るのと同時に落ちるように眠った。

9

ふと気づくと、桜は湖のほとりにいた。
目の前には澄んだ水を湛えた湖があり、その対岸へは随分と距離があるらしく、向こうに見える岸は霞んでいる。背後は鬱蒼と茂った森で、いつ、人が歩いたのかも定かではないような細い獣道が、申し訳程度に森の奥へと延びている。案内もなくそのまま入って行ったとしたら、二度と出ては来られないのではないかと思えるような様相を見せる森だった。
ここは、どこだろう。
周囲を見回して人の気配がないことを知り、桜は溜め息をついた。
現実の問題もわけがわからないというのに、夢の中でもこれかと思うと頭が痛い。
そこまで考えたところで、これが夢であると自覚している事実に気づいて驚いた。意識はしていなかったが、自分で最初から納得していたらしい。
何故なら、それは、繰り返し見る夢の雰囲気にとてもよく似ていたからだった。だが、こんなふうにはっきりと景色を見るのはほとんど初めてに近かった。それに、夢にしては質感がある。湖から吹く風のわずかに湿った心地よさも、木々のむせ返るような匂いも、夢とは思えない現実感でそこに存在していた。
ここ数日は変なことが続いていて、大抵のことには驚かないでいられるのではないかと思ってはいたが、さすがにこれはない。夢と自覚した上で、現実と遜色のない光景を見ているだなんて、普通ならありえなかった。
「……全く、何なの」
はあ、と溜め息をついた。
普通なら、こんなリアルな夢はありえない。だが、これは夢でしかありえない。

何より、自分で夢としっかり認識しているのだから。
それでも、妙に現実感だけはある。しゃがみ込んで地面に触れてみると、土の湿った感触が伝わって来た。ますますリアルさが増して、気味が悪い。
「さて、あなたはここをどう解釈するかしら？」
いきなり背後から声をかけられ、桜は驚いて振り返る。つい先ほどまで周囲には誰もいないと思っていたのに、誰かが急に現れたからだ。夢であればそういう突然な場面転換があってもおかしくはないが、桜が現実的な感覚に支配されている以上、その展開に驚いてしまっても無理はない。
今までは何の気配もなく、唐突に現れた相手だ。普通とは違うのかもしれない。そう思いながら振り返り、そこに立っていた相手を見て更に驚いて立ち上がった。
「……あなた、は」
「私はあなたで、あなたは私。そして、私たちは全く別の存在でもあるのよ」
そこにいたのは、桜と全く同じ顔形をした少女だった。
違うのは、桜が学校の制服であるのに対し、相手が巫女のような服装であることだけだ。イナミと名乗った男が纏っていた神職のような意匠の衣とは、また違う。だが、完全な巫女装束というわけでもない。色あいも、桜が思っている巫女装束とはまるで違う。
その服を桜の持つ知識で言い表すのなら、巫女装束と言うのが一番しっくりと来る。それだけのことだった。
「あなたが、私に話しかけていたの？」
「まあ、そういうことになるわ。でないと、あの子たちが道に迷ってしまうでしょう？」
「あの子たち……緋月たちのこと？」
「そう」
「あなたは、一体誰？　緋月たちがあの人と呼ぶのが、あなたなの？」

「そうね」
巫女装束の、桜ではない桜の顔をした少女は、少し困ったような表情を浮かべて肩をすくめた。
「あんなふうに言われると、私としても困るんだけど。まあ、間違ってはいないかな」
「私としては、正直、あの人とやらが迷惑よ。つまり、あなたのことでしょう？」
「ふふ、違いないわね」
楽しそうに笑って、彼女は周囲を見回し、手ごろな大きさの岩を見つけて腰を下ろす。そして、桜を手招きした。
「立ったままというのも、どうかと思うから。座って」
何となくその言葉には逆らえないものを感じ、桜はそれに従って示された場所に同じように腰を下ろした。
「たいした話をするわけじゃないわ。でも、結果的に巻き込んでいるから」
「あなたは、私なの？」
「正確には、違うわ。この姿は、便宜上そういうふうにしているだけで、私の本来の姿がどうだったのかなんて、もう忘れてしまったの。何しろ、相当に昔の話だから。私自身も眠っていたし、こうして再び意識を持つことがあるなんてことも、考えたことはなかったのよ。でも、これも巡り合わせだとか、運命だとか、そういうのなのかもしれない」
「巡り合わせ……」
「あの子たちを私の事情に巻き込んで、付き合わせてしまったのは私。でも、こうしてあなたと話をすることができるのは、天の采配に違いないかもしれないわ。まあ、私は神から嫌われているんだけど」
自嘲するように言ってのけたその言葉に、ほんの少し前に見た夢の欠片が蘇る。
「それは、あなたが禁じられた子供だから？」

「……夢で見たの？」
「まあ、うん」
そう言うと、彼女はわずかに顔を曇らせる。
「我が背子を　大和へ遣ると　さ夜更けて　暁露に　我れ立ち濡れし」
低く、甘く。どこか歌うように、彼の唇からひとつの歌が紡ぎ出された。
知らない言葉だ。けれど、どこか懐かしい想いがそこにある。それは、理屈ではなく感じられる何かだった。
「記されていることが全てじゃないの。決して表に出してはならないこともある。だから、私は、名前を持たない」
「名前、を……？」
「忘れたのとは違うわ。私には、最初からそれがないのよ。私はね、存在してはならない存在だから。名前をつければ、そこに言霊が宿ってしまう。そのことが、父と母を追い詰める。だから、私は名を持たぬまま、神域と呼ばれる場所に捨て置かれた」
最初からいない者。いてはならない者。
全ての者は彼女の存在を無視し、けれど、その出自ゆえに見捨てることだけはままならなかった。ただ、生かされていた。そのためだけに日々の食事は与えられ、最低限のものだけは手にすることはできた。
形ばかりの敬意と、畏怖。それだけが、周りにある感情の全て。
それは、どこまで行っても満たされることのない、永遠の孤独だ。手を伸ばしてもその手を取ってくれる者は一人としておらず、声を上げても聞き入れてくれる者もいない。それを諦めという名の感情で受け入れるまで、どれほどの涙と嘆きがあったのだろう。
だが、それでもいいと思っていた。そうあるべきなのだと、わかってしまった。
顔も覚えていない母と、会ったこともない父。周りにいるのは、自分を腫れ物に触るように扱う者ばかり。

遠く都で命を落とした父の噂を伝え聞くたび、それゆえに悲しみに暮れる母の面影を思い出すたび、生きることを許されている現実を噛みしめる。たとえ、それが体面だけを取り繕うための措置であるのだとしても、そうして生きて行けるのならばそれだけでよかった。

けれど、全ては壊れる。壊れる時が来る。それは予感であり、確信だった。

その壊れる時が、予想よりも速く訪れてしまっただけだった。

「本当は、あの子たちを巻き込むつもりなんてなかった。私は、本来ならばいないはずの存在だったから。あの子たちが心を傾けて満たされるような、返せるものなんて何も持っていない。でも、あんなにも真剣に懇願されて、心を動かさない人間なんていないのよ。それに……まあ、正直言うと、しつこくてね。面倒になったというのもあるのよ。特に……」

「緋月が？」

「そう、緋月が」

どうやら、同じことを感じたのは間違いではないらしい。くすりと笑って、彼女は空を見上げた。

「名は言霊であり、縛りでもあるわ。名を与えてしまえば、あの子たちは私の言葉に左右されてしまう。私の命によってしか、動くことができなくなる。それは、本来、自由であるべき精霊の本質を捻じ曲げてしまうことになる。でも、あの子たち自身がそう望んだ」

そうして空を見上げる彼女の瞳には、もしかしたら、ずっと前に見た緋月たちの姿が見えているのかもしれない。今の桜が知る、制服を着た普通の高校生にしか見えない緋月たちではなく、かつて、人とは関わることなく自由に生きていた精霊としての彼女たちだ。

「私は、あの子たちの望みを叶えた。でも、あの子たちが本当に望んでいたのは、それだけじゃないの。私が叶えたのは、入り口にしか過ぎない。それでも、あの子たちは私の与えた名に縛られ続ける。私が死んでも、魂が在り続ける限り。だから」

と、言葉を切り、彼は桜を見た。
「私は、私自身に封印を施したの。私が死んでしまったら、あの子たちが、私とは関係のない場所で生きて行くことが、できるように。私の与えた言霊に縛られることなく、精霊としての姿を取り戻せるように」
「それは、どういう……」
「名は言霊であり、縛りだと言ったでしょう。私は、私自身のそれをあえて希薄にすることで、あの子たちを眠りから解放しようとした。元々、私に名前はないし、それは難しいことではなかったわ。でも、あの子たちはそれを善しとはしなかった。そして、あの子たちは自身を眠りにつかせ、永遠の闇へ意識を沈めることを選んだ。それを知って、私は焦ったわ。どうにかしようと足掻いた挙げ句、変なのを呼び寄せてしまったの。それは、あなたにとって申し訳ないと言えばそうなんだけど」
変なの、とは、もしかして西野のことだろうか。
突っ込みたくても突っ込めない微妙な雰囲気に、桜は何とも言えない気分になった。
「貴き教えの名の下に」
「え」
「あの子たちのこと、お願いね。私にはできなかったことを、あなたならできる」
「でも、私は」
そんなことを託されても、正直、困る気がした。
桜は普通の人間でしかないし、目の前の彼女のように特別な生まれを持つわけでもない。そんな自分に、精霊である彼らをどうにかできるとは思えなかった。
「できるわ」
と、彼女は桜の内心を読んだかのように言った。全てを見透かされているかのような、そんな感覚がそこにある。
「あなたは私だけど、私じゃない。本来なら、魂を受け継いでいる

ってだけの、ただの他人なの。それでも、あなたは私でもある。同じ記憶と魂を、深い場所で共有している。……だから、あなたは、あの子たちを導いて行ける」
「……それは、一癖も二癖もある彼らを、私に押し付けるって意味じゃないの？」
「まあ、そうとも言うけど」
そう言って、彼女は笑う。
彼女は桜と同じ顔で、けれど、自分とは違う表情をするのだな、と、ぼんやりと思う。そのことから、私はあなたで、あなたは私じゃない、と言った彼女の言葉の意味が、何となくわかる気がした。
彼女の言葉を信じるのであれば、彼女と桜は本質的には同じだ。だが、二人が歩いて来た道筋はまるで違う。だから、違う表情を浮かべ、違う言葉で語る。そういうことなのだ。
「たとえ手の掛かる相手でも、私には大切な仲間だったから。だから、ね、あなたに託したいの」
「……そう」
そうして、何とはなしに二人とも黙り込んだ。
その沈黙は、決して不快なものではない。吹き抜けて行く風が少しだけ和らいで、彼女は相好を崩した。
「……風は、好き？」
「風……？」
「イナミは、寂しがり屋なの。いつもはあんなに取り澄ました顔をしているけど、結構どうでもいいことで感動して泣いたりするし、いきなりわけのわからないことで怒り出すし、私には彼が一番理解できないわ」
「緋月は？」
「緋月は、わかりやすいでしょう？　火の姫は、良くも悪くもまっすぐだもの。気持ちがいいくらいに」
「……あなたの気がかりは、イナミ、なの？」
その会話の流れから辿り着いたことを問えば、彼女は答えに詰ま

り、考え込むように目を伏せた。
「そう、かもね」
ややあってつぶやかれた答えは、桜が想像した通りのものだ。
「私は、たぶん、彼にひどいことをした」
「ひどいことって……だから、あの人、私に冷たいの？」
緋月たちとは違い、あのイナミだけは桜とは距離を置こうとしているように感じる。おまけに、桜を認めないだの何だのと、否定的発言も繰り返していた。
その理由が、彼女との過去の諍いか何かだというのなら、とばっちりもいいところだ。
元の顔の造作が整っているだけに、刺々しい言動と無表情で向けられる冷たい眼差しは、ひどく心臓に悪い。繰り返し見る夢の中で感じる居心地のよさや、聞こえる穏やかな声音はイナミに似ている。そんな流れからしてみれば、桜は少なからず好意に似たものを抱いているというのに、相手がああではどうにもならない。
「喧嘩をしたとか、そういうことじゃないのよ。私は、彼に取り返しのつかない後悔と自責の念を負わせた。彼の手が届かないことを知っていながら、私は、最後に残酷な言葉を残したから」
「……それって」
激流に飛び込む、その瞬間の身を切られるような風の冷たさ。手を伸ばしているのに、届かない距離。涙で滲んだ視界の向こうで、あの秀麗な美貌が歪む。唇が刻む名は、風の音にかき消されて何も聞こえなくて。
その光景を、桜は、確かに知っていた。魂に刻まれた記憶として、自分の中に抱え込んでいた。
「だから、彼を救えるのはあなただけ」
彼女は立ち上がり、桜が立ち上がるのを手助けするように手を差し出した。
その手を何の疑問もなく取り、立ち上がる。自分と同じ顔をしているようで印象を違える彼女は、目の前で少しだけ笑った。

「……手を、出して。左も」
彼女の言葉に従い、二人の両の手のひらを向かい合わせるように重ねて、互いの指を絡めるようにして握った。
手と、手。触れ合ったその先は、同じ温度を持って、同じ鼓動を刻んでいる。その距離の近さにお互いの瞳の中にお互いの姿を覗き込んでしまって、何となく笑いがこみ上げた。
彼女は目を閉じて、ひとつ、深呼吸した。
「貴き教えの名の下に、今、全てをひとつに」
どこか遠くで、しゃらんと鈴の音が響いたような気がした。
触れ合い、重ね合わせられた手のひらが、熱い。彼女の身体がゆらゆらとした靄のようなものに包まれたかのような、そんな感覚が支配する。
輪郭がぼやけ、視界がひどくぶれているように思えて、桜は目を瞬かせた。
「……あなた、薄く……？」
それは、目の錯覚かと思った。だが、そうではないことにすぐに気づく。彼女の身体は見る見るうちにその輪郭を失い、色は薄らいで存在感も希薄になって行く。
それを呆然と見つめるしかない桜に向かって、彼女は、やけに晴れやかな笑みを浮かべて見せた。
「……イナミを、お願い。あなたは私の記憶を引き継ぐことになるから、戸惑うかもしれないけど、それも、あなただから」
「ちょ、ま……っ」
声を出した時には、既に彼女の姿はなかった。
それに気づくのと同時に、今までは存在していなかったはずの記憶が自分の中に息づいていることを知る。それは、決して他人の経験の積み重ねの記録ではなく、桜自身が味わったのだろう感情の発露と共に在った。
……そうだ、と、思った。
自分は探していたのだ。ずっと、あの存在を。どこか寂しげな表

情で漂う、風の将を見つけ出したいと、そう思っていた。
それが、かつて交わして果たせなかった約束の、辿り着く場所だった。

10

はっとして目を覚ますと、そこは自分の部屋のベッドだった。
やはり、あれは夢だったのだ。もう一人の自分と会い、魂の奥底にしまわれていた記憶を受け取ったのは、全て夢の中のできごとだ。
それでも、桜の中に彼女から受け取ったものがあるのは現実だった。あれらの全てを夢でしかないと片付けてしまうには、はっきりとした記憶がありすぎた。
あれは、桜自身だ。
桜が自覚していなかった、本当なら眠ったまま隠されているはずだった、魂に刻まれた記憶の欠片。それを解放したのは、ただひとつのためだ。
約束を、果たすため。
かつて想うがゆえに残酷な言葉で傷つけた大切な相手を、もう一度、この手に取り戻すために。
「……イナミ」
「呼びましたか」
無意識に唇から零れ落ちた名前に反応を返され、桜はぎょっとして声の方向を振り向く。
窓の傍、引き忘れたカーテンの隙間からうっすらと差し込む月の明かりに照らされるようにして、イナミが立っていた。
「……あなた、どうして」
「鍵が開いていましたので」
だから悪くない、とでも言いたげにさらりと流して、イナミはそっぽを向いた。
「いや、それは……」
「無用心、と言うのではないのですか。このご時世で鍵も掛けずに眠るなんて、普通はおかしいのでしょう？」
僕はこの世界の常識なんてよく知りませんけど、と、ぼそぼそと

続けられる。その声音がどこか拗ねているようで、桜は笑いそうになる。
何と言うか、これまでの言動から来るイメージのせいで大人びた印象を抱いていたのだが、そこかしこにこちらとたいして変わらない幼さが垣間見える。桜とてろくな経験もない高校生でしかないが、まるで達観したかのような言葉の選び方を思えば、今の方がよほど好感は持てる。
「まあ、そうかもしれないけど、誰にでもうっかりした失敗はあるわよ」
「あなたは、その手のうっかりが多いように見受けますが」
「……そんなことはないと思う、けど……」
勝手にイメージを捏造しないでもらいたいものだ。桜は憮然としてベッドから降りると、窓辺に立っているイナミの傍に歩み寄り、その手を取った。
「……？　何ですか？」
訝しげに眉根を寄せて、けれど、その行動を咎めることも拒むこともせずに、イナミは尋ねた。
「あなた、どうして、ここにいるの」
「ですから、鍵が開いていたからだと……」
「そうじゃないわ。私が聞いている意味が、わからないわけじゃないでしょう？　はぐらかさないで」
「特に意味はありません」
「意味はないの？　本当に？」
イナミの手を引くように力を入れれば、彼は驚いたように小さく息を呑んだ。
「私には、あなたに会いたい理由があるわ」
「……あなた、は」
「私は、あなたが会いたい相手とは違うのかもしれない。同じなのかもしれない。そんなのは、私自身にだってわからない。でも、あなたがずっとそれを引きずっていることはわかるの。わかってしま

うの」
「あなたに何がわかるんですか！　あんな、目の前で、置いて行かれた僕の……っ！」
「わかるわよ」
イナミの言葉を遮るように、桜は言葉を重ねた。
「あれも、私だから。置いて行かなければならない方だって、同じくらいに苦しい」
「だったら、どうして……っ！」
「どうして……だろうね」
あの時、あの道を選ばなくても何か方法はあったはずだ。そう思えてならない。
けれど、それは、あれを過去の映像としてしか捉えられない桜だから思うことであって、あの場にいた当事者にとってはそれ以上の選択肢はなかったのだろう。あれが桜自身も共有する『記憶』であることは理解していても、どこか『記録』としか見えない部分があるのは確かだからだ。
それは、無意識下にあったものを自覚した今でも、同じだ。
「でも、私は、あなたとの約束を果たしたいと思っている。それだけは、本当」
「やく、そく……」
呆然と、イナミはつぶやいた。
「言ったでしょう。春になったら、神域の奥にある桜の古木を見に行こうって」
「……っ、あの古木は、もう」
「別に、あれじゃなければ約束が果たせないわけでもないわ。どこの桜でもいい。私が、あなたと行くことに意味があるんだから」
イナミは、驚いたように目を見開いた。
「あなたは……」
不意にイナミに強い力で腕を引かれ、それに疑問を抱いたりする暇もなく抱きすくめられた。まるで手放すことを恐れるかのように

強く、きつく、腕が回される。桜は一瞬身体を強張らせたが、そのぬくもりをどこかで知っているような気がして、うろたえた。
そして、そこで気づく。気がする、のではない。知っているのだ。かつて交わした約束の存在を、知っているように。
「もう一度、抱きしめても許されますか」
ひどく怯えたような震える声で、耳元で落とされる声。既にそうしているじゃない、と言いたい気持ちに駆られたが、やめておいた。
イナミが言っているのは、そういう意味ではないとわかってしまったからだ。
「……私は、あなたを不安にさせた？」
「今更、あなたがそれを言うんですか」
拗ねたような口調は、これまでに何度となくかけられた刺々しさを失っている。
二人の間の、何が変わったのだろう。何も変わっていない、そう思うのに。
「私は、知らないから。あなたのことも、昔のことも」
「それでも、あなたはあなただ」
溜め息と共に零れ落ちた言葉は、ひどく不安そうな響きに満ちていた。
「地の賢者殿に聞きました。あなたは、自ら全てを封じていたのだと。そして、それは今のあなたの意思ではないと」
「そうらしいね。私も、よくわからない。……でも」
少し考えて、それでも、言うべき言葉はひとつしか思い当たらず、桜は先を続けた。
「私は、今、ここにいる。それじゃ、駄目？」
息を呑む音が聞こえ、桜を抱きしめる腕に更に力が込められた。視界の端に映るそれは小刻みに震えていて、彼の感情が大きく揺らいでいるのを教える。
「ずっと……僕は、夢見ていました。あなたに、もう一度会える日を」

「……うん」
「あなたのためになら神を射ることだって厭わないと思ったのに、あなたは、そんな小さな願いさえ聞いてくれなかった」
「あなたの力は、神に翻意を見せるためにあるわけじゃないでしょう？」
「それでも、僕は」
「イナミ」
一方的に抱きしめられるのではなく、彼の身体を抱きしめる。互いの想いを、伝え合うように。
人とは違うのだとわかっているのに、そのぬくもりは人と変わることはなかった。
そこに、沈黙が落ちる。
それは、決して居心地の悪い不快なものではなかった。互いのぬくもりがそこにあることが幸福に感じるような、優しい静けさだと思った。
「……こんな日がもう一度来るなんて、あの時は、思いもしませんでした」
イナミはそう囁いて、そっと耳元に唇を落とす。
ちゅ、と軽く口付けられる音が至近距離で聞こえ、その音が羞恥を煽る。身を捩って逃れようとしても、それは叶わない。イナミの腕によって、桜の身体は拘束されているも同然だったからだ。
「ちょ、待って……っ」
「待てません。僕が、何年待ったと思っているんですか？」
あの時から、どれだけの時が経ったのか。
おそらく、正確にはわからない。あれは決して歴史の上でのできごとではなく、今の世界の流れの中でどう位置づけられた部分なのか、わからないからだ。
それでも、気の遠くなるような長い時間の中、彼がその想いだけを抱えて来たことは、わかるから。
その存在を確かめるかのように、イナミの指が桜の身体の上を滑

る。服越しにあちこちを触られて、むずがゆいような感覚に、身を震わせた。
鼓動が、跳ねる。
触れられるたび、その息遣いが耳に滑り込むたび、まるで反射のように心臓が速度を速めていく。その音が部屋の中に響いている気がして、居た堪れない。
「……口付けても、いいですか」
こっちの了解も得ずに触れまくっておいて、今更何を、と思わなくもない。けれど、目の前のイナミの、何かを堪えたかのように切なげに寄せられた眉がやけに色めいて、その表情に余計に心臓が跳ね上がり、ただうなずくことしかできない。
その答えを悟った瞬間、わずかにイナミの身体が離れ、束の間、見つめ合う。
そして、どちらからともなく、何かに導かれるように唇を重ねた。
最初は、ただ、触れ合うだけだった。何度となく角度を変えて、啄ばむように唇を触れ合わせる。
それは、互いの存在がそこにあることを確かめる儀式のように思えて、桜はぎゅっと目を閉じる。
視界が閉ざされることで、息遣いや体温がよりリアルに感じられた。
指先が首筋に触れ、そのままゆっくりと滑らされて頬を撫でて行く。その感覚が、妙に居心地が悪い。それは、不快という意味ではなく、身の置き所がないようなふわふわとした感覚に支配されるがゆえのことだ。
触れられた場所から、熱くなる。そんな気がしてならない。そして、その感覚を引き出すかのような意図を持って動く指先が、ひたすら腹立たしい。
なのに、それを止めたいとは思わなかった。
「ずっと、こうして、あなたに触れたかった。どれだけ焦がれたか、わからない」

熱を孕んだ吐息と共に、囁かれる声。ぞくりとした感覚が身体の中に生まれ、熱を上げる。その熱に翻弄されて、どうにかなってしまいそうだった。
再び触れ合わせた唇は、今度は、呼吸ごと全てを奪って行くかのような、激しいキスになった。
放したくないとでも言いたげな、息もつかせぬキスだ。息苦しさに空気を求め、わずかに開いた唇から舌がねじ込まれる。歯列をなぞり、そのまま、奥に隠れるように縮こまる桜のそれを誘い出すかのように、深く口づけていく。
吐息も、何もかもを飲み込むようで、それは甘く、深い。
送り込まれる唾液が、口の端から零れ落ちる。それを見て取って、イナミがそっと指先で拭った。
「……何だか、おかしなものですね」
「何、が……？」
「僕は人間ではないのに、人間のように興奮している。あなたを見て、全てを得たいと切望しているんです」
わずかに自嘲を滲ませ、イナミは笑みを浮かべた。
「そんなこと、私は気にしない。どうだっていい。あなたが……人であろうと、そうでなかろうと。あなたは、あなた——イナミ」
目の前の男が、小さく息を呑む。そして、その整った顔立ちがくしゃりと歪められた。
「……あなたは、僕を、どこまで幸せにしたら気が済むんですか……」
泣き出す寸前のようなその声は露を含み、やたらと艶めいて聞こえる。
「私、は」
何を言ったら伝わるのか、わからない。それでも、何も言わないままでいることなんて、できやしない。
「人とか精霊とか、そんなことで、あなたを区別できない」
そんなことは、どうでもいい。

ただ、傍にいて、その存在を感じていられるのなら、それだけで。
「あなたを、感じさせて」
噛み付くように、キスを返す。
「愛しています。あなたさえいるのなら、もう、他に何も要らないんです」
それは、懇願だ。
失う痛みを知っているから、二度と味わいたくないと切実に願う。
そして、得られたことの喜びを、何よりも深く刻む。
「……もう、置いて行かないで下さい」
イナミの泣きそうな声が聞こえたような気がして、桜は笑いそうになる。
もう、置いて行ったりしない。こうしてもう一度手に入れたのだから、ここから、再び始める。
「置いてなんか、行かない」
そう言ってやれば、あまりにも、嬉しそうに笑うから。
「一緒に行こうね。春になったら、ずっと前にあなたと約束した、桜を見に」
「あなたの名の花を、僕に、もう一度教えて下さい」
あの時に約束したはずの桜の古木は、もう、その姿を見ることはできないけれど。
たとえ、同じものでなくてもいい。
かつての約束を果たす、その事実こそが大切なのだから。

そうして、桜の日常は戻って来る――はず、だった。

翌朝、登校した桜が見たのは、昨日と全く変わる様子もなく自分

の後ろの席に座っている緋月の姿だった。
「……緋月？」
「おはよう、遅刻ギリギリなの？　もっと早く来たら？」
「と言うか、どうして、あなたがいるの？」
「いたらいけないの？」
と、じろりと睨まれる。
元々の顔立ちがかなりの美少女であるだけに、そういうきつい表情をすると凄みが増す。思わずたじろいでしまった桜を、誰が責められるだろう。
が、疑問に思ったことはそのまま流したりはできない。
昨日の件で全ては終わったのではないのか、と、そう思ったからだ。
「いけなくはないけど、まだここにいる理由があるの？」
「理由がないと、学校に来たらダメってこと？」
「……いや、そういうことも言ってないけど」
「じゃあ、別にいいじゃない。まだ、いろいろ気になることもあるし、思いのほか楽しめそうだし」
「学校が？」
「うーん、学校は別にどうでもいいんだけど」
と、とんでもないことを当たり前のようにのたまう。一般的な生徒からしたら、口にしてはならないような発言だ。
もちろん、緋月がここで優等生なのかと言えば、そういうわけではあるまい。大体、まるで授業は聞いてないし、たまに聞いていたかと思えば、いきなり不機嫌になって出て行った先日のこともある。
「どうでもいいなら、何で来るの？」
「暇つぶしになるし、あんたもいるし、それに、いろいろとできそうだし」
「いろいろって……」
そもそも、学校は暇つぶしの場所ではない。
桜がそう言ったとしても、おそらく、緋月には通じないのだろう。

とは言え、そんな常識に縛られている緋月は、彼女らしくないように思えてしまうから、それはそれでいいのかもしれない。
それがどこまで通用するのかまでは、桜が関知する範囲ではない。どうせ、周囲には適当に暗示をかけて大抵のことを誤魔化すのだろう。
「手始めにね、ここから始めてみようかと思って」
「は？」
きらきらとした笑顔で言われ、桜は自分の席に鞄を置きながら胡乱げな眼差しを向けた。
「始めるって、何を？」
「そんなの決めてないわ。まずは、社会勉強からよね！　人間の世界をちゃんと学びなさいって、昔、怒られたから」
「ああ、そうなの……」
適当のような、そうでもないような緋月の返答に、思わず苦笑する。
緋月をそう言って怒ったのは、今も桜の中にいる彼女なのだろう。
彼女は、消えたわけではない。
ただ、再び眠りについただけだ。だが、その眠りは二度と途切れることはない。そして、時間をかけて桜と溶け合い、ふたつの存在はひとつになって行くはずだ。
彼女が、最後に望んだように。
何のしがらみもない世界で、人も精霊も分け隔てることなく笑っていられたらと、そう望んだ通りに。
それに付き合ってみるのも、悪くないと思った。
何より、彼女は桜で、桜は彼女だ。望むものが同じであったとしても、不思議はない。
「で、私は、何をすればいいの？」
「当然、手伝ってもらわないと困るわ！」
その自信たっぷりな様子に、これはこの先何をさせられるやらわかったものではないと、桜は内心冷や汗をかいた。

放課後。
再び緋月によって引きずられて行った資料室で、桜と同じ制服を来て困ったように笑うイナミに会い、すっとんきょうな声を上げてしまうのは―また、別の話。

FIN

１０（後書き）

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

これは、再会のための物語なので、この話はこれはこれで終わりです。

過去の『桜』とイナミの話も、ちょっと書いてみたい気がします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6939w/

桜舞う日

2011年11月2日02時09分発行